PUBLIC PLACE REPORT 2022.03

第８回全国まちなか広場研究会 in 熊本

全国まちなか広場研究会 設立趣旨 P.2
第８回広場研究会フライヤー P.3
研究会プログラムの概要 P.4-5
「だんだんつくる」× 熊本駅周辺都市空間デザイン P.8-15
「よかとこつくる」× 桜町花畑地区周辺まちづくりマネジメント P.16-21
「みんなでつくる」× 市民協働 P.22-27
熊本のまちなか広場をまとめる P.28-29

全国まちなか広場研究会 設立趣旨

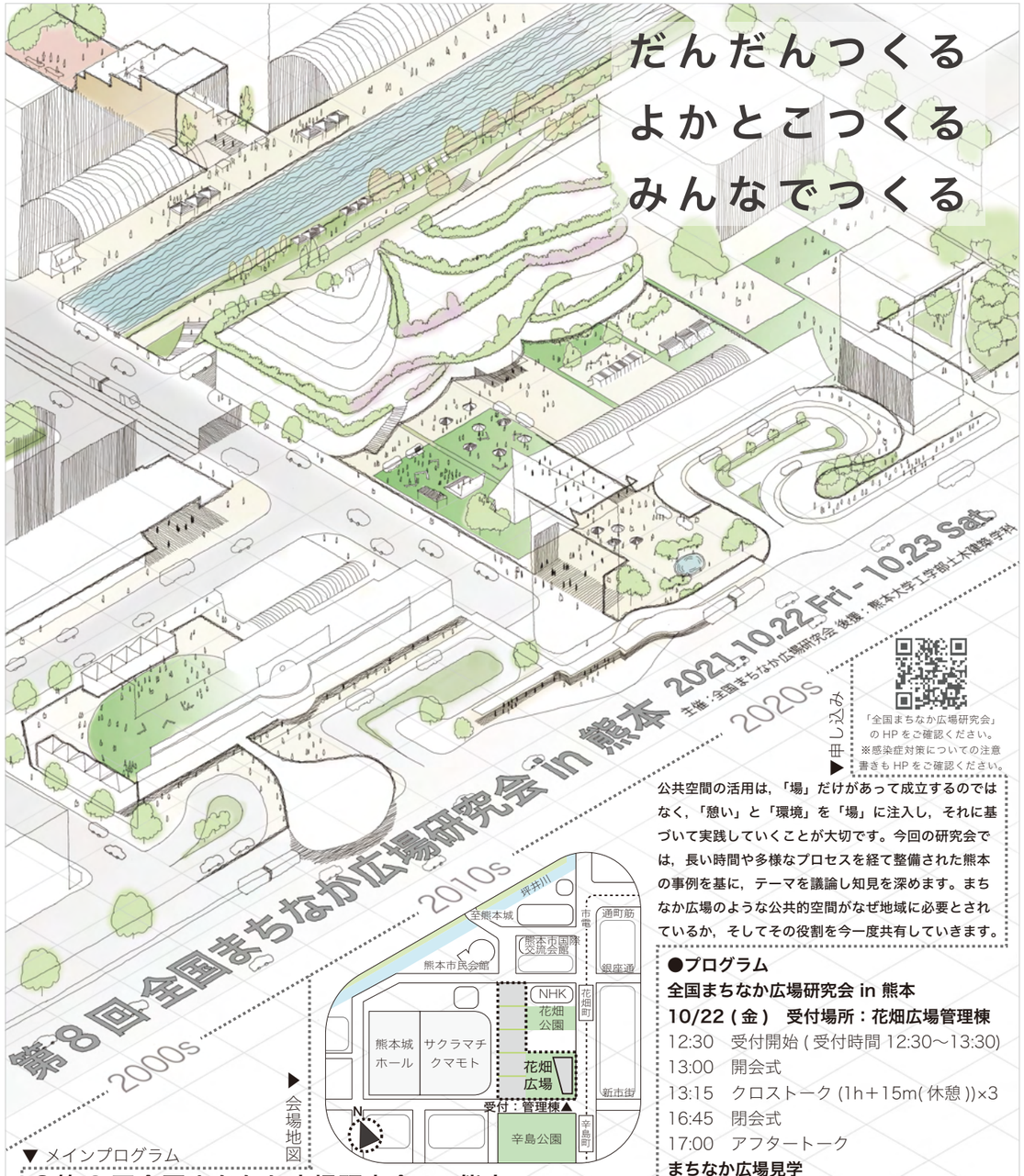
現在、わが国の人口は減少し高齢化が進み、経済規模は相対的に縮小しつつある。これに伴い、経済活動から趣味嗜好を楽しむといった活動に至るまで種々のアクティビティが停滞し縮小することが懸念され、それに伴う人と人との交流まで低下する可能性がある。しかしながら、一方でひとり一人の生活においての時間的余裕は増加すると予想され、今後迎えるその様な時代において人生をより豊かに生きるためには、多種多様な価値観を受け入れる包容力や、様々な人と会話を楽しむためのコミュニケーション力を個人個人において培うことが不可欠であるように思われる。

人々がそれらの力を培うための場として、「まちなか広場」に期待したいと考える。「まちなか広場」とは、都市においてそこに暮らす多くの人々が通りかかる場所であり、旅人がその都市を訪れた際には最初に降り立つような場所である。そして、その場が消費行動を伴わなくとも自由に居心地良く居られる場所であれば、そんな素晴らしいことはない。

都市の中心市街地は、本来、公共交通の利便性が良い場所である。そこがさらに、車が自由に使えない人も、足腰に少し不自由を感じるようになった高齢者もアプローチしやすい区域であってほしいと考える。そこに「まちなか広場」を整備することで、人が集い、人々の心にゆとりが生まれ、新たな交流が始まるのではないだろうか。これからの時代に求められる都市文化の成熟には、「まちなか広場」によって創出されるゆとりある時間と空間が必要なのではないだろうか。そして、そうしたゆとりから人と人とが互いを知り、感じ合い、心を通わし、新しい関係が生まれると考えたい。そして、この関係性こそがまちなかに誕生する新しいソーシャルキャピタルであり、それを醸成することが住民に尊い時間をもたらす次の時代の都市を創出できるのだという可能性を訴えたい。

以上に鑑み、この研究会は、「まちなか広場」の価値に関する研究を行い、広場の整備と管理運営の望ましいあり方が普遍化されることに寄与することを目的とし、「公共広場」×「公共交通」の連携による価値の創造が都市における基幹事業と位置付けられることを目指し、広く関係者の支持を期待するものである。

平成 25 年 9 月 27 日



メインプログラム

まちなかを考える３つのクロストーク

第８回研究会では，長い時間や多様なプロセスを経て整備された熊本の事例を基に，テーマを議論し知見を深めます。まちなか広場のような公共的空間がなぜ地域に必要とされているか、そしてその役割を今一度共有していきます。そのために本会でのメインプログラムでは「だんだんつくる」「よかとこつくる」「みんなでつくる」を切り口とした、３つのクロストークを設定しました。クロストークでは熊本で実践を続けている３者、熊本の外でまちなか広場での実践に取組む３者に登壇してもらい、「内」と「外」からの視点により熊本のまちなかを見通す試みを目指しました。当日は、関係者を含めた現地参加が 55 名、オンライン参加が 14 名の計 69 名の参加を確認。多くの方々とまちなかを考えるきっかけをつくっています。

ファシリテーター プロフィール

星野 裕司氏 熊本大学くまもと水循環・減災研究教育センター准教授

東京大学大学院工学系研究科修了。専門は景観デザイン。株式会社アプル総合計画事務所を経て，現在熊本大学くまもと水循環･減災研究教育センター准教授。博士（工学）。社会基盤施設のデザインを中心に, 都市, 河川, 公園, 農村, 震災復興など，様々な地域づくりの研究・実践活動を行う。主な著書に『風景のとらえ方・つくり方　九州実践編』など。主な受賞に、土木学会論文奨励賞、2012 年グッドデザイン賞サステナブル・デザイン賞（曽木の滝分水路)、都市景観大賞（熊本駅周辺都市デザイン）など。

田中 智之氏 熊本大学大学院教授

早稲田大学大学院修了。同大学専任助手、同大学芸術学校客員講師等を経て 2005 年より熊本大学工学部助教授。2018 年より現職。博士（建築学)。建築設計だけでなく、近年ではまちづくりや独自のドローイング「タナパー」も展開。主な作品に「熊本駅周辺地域都市空間デザイン（2013 年都市景観大賞)」「桜町・花畑周辺地区まちづくりマネジメント（2015 年まちなか広場賞特別賞)」など。主な著書に『建築の森･熊本を歩く』『階段空間の解体新書』(彰国社)『超建築パース 遠近法を自在に操る 26 の手描き術』(学芸出版社）などがある。

田中 尚人氏 熊本大学熊本創生推進機構准教授

京都大学大学院工学研究科修了。京都大学大学院助手，岐阜大学専任講師を経て，2006 年熊本大学工学部社会環境工学科助教授に着任。2009 年度はフランス国立工芸学院（CNAM）にて客員研究員，2012 年度に二ヶ月客員教授を務めた。2010 年より熊本大学政策創造研究教育センター准教授，2019 年度より現職。博士（工学）。土木史，景観論を専門として，熊本県内の文化的景観保全，土木遺産の保存・活用，参加型まちづくりに携わる。主な著書に『土木と景観－風景のためのデザインとマネジメント』(学芸出版社）などがある。

ゲストスピーカー プロフィール

北原 啓司氏 弘前大学大学院地域社会研究科長・教授

全国まちなか広場研究会副会長。東北大学大学院工学研究科博士課程修了。東北大学建築学科助手を経て、1994 年より弘前大学。博士（工学)。専問は「まち育て」。各自治体の都市計画や住宅政策、景観に関わる委員を務める傍ら、東日本大震災以来、国土交通省、大船渡市、宮古市、石巻市等の震災復興に関わる様々な委員を務める。またコミュニティＦＭ「まち育てないと」DJ を 20 年にわたり継続中。著書に「空間を場所に変えるまち育て」（萌文社)、対話による建築・まち育て（共著、学芸出版社）ほか。

泉 英明氏 有限会社ハートビートプラン 代表

都市プランナー。大阪なんば、西梅田、豊田、岡崎、姫路のまちなか再生や公共空間のプレイスメイキング、工業地域の住工共生まちづくり、水辺空間のリノベーション「北浜テラス」「水都大阪」事業推進、「長門湯本温泉」の温泉地再生、市営住宅エリアの再生「大東市 morineki プロジェクト」などに関わる。まちづくりの「まち医者」としての関わりを目指す。著書に『都市を変える水辺アクション』(共編著、学芸出版社)、『民間主導・行政支援の公民連携の教科書』(（共著、日経 BP 社）

半田 満氏 合同会社 H&A brothers 代表

福岡県久留米市生まれ。大学進学を期に上京。不動産ディベロッパー勤務を経て、U ターン。大家としてマチとつながる賃貸アパート『H&A Apartment』（駅前３０秒の家庭菜園付アパート）の経営を中心に、職人シェアオフィス『BASE』の運営、賃貸物件・店舗リノベーションの設計施工、DIY ワークショップの企画、団地再生やまちづくり活動にも取り組む。建築と不動産を軸に地方都市で豊かな暮らしを送るための「場づくり」と「コトづくり」を行っている。

サブプログラム

まちなか広場見学会

休日の早朝からの開催にも関わらず 20 名を超える参加者のみなさまと、クロストークの対象地でもある桜町・花畑広場周辺、熊本駅周辺地区、菊池市民広場・菊池まちかど広場などを見学しました。心地の良い晴天の下、花畑広場では、道路が広場化され大きく変わった広場デザインに関することや民有地との調整について、熊本駅周辺では長い時間をかけて形成された都市デザインに関することや現場での苦労話について、菊池の広場では温泉街とのつなげ方や限られた予算内でのデザインについて意見交換がされました。熊本市内では路面電車を使って移動を行い、菊池では足湯に浸かって説明を聞くなど、現地ならではの体験をしながらの見学会でした。夕方からは、白川・緑の区間で開催されている「白川夜市」にも参加し、参加者同士の交流も行えた一日となりました。

01. 花畑広場周辺

02. 熊本駅周辺

03. 菊池市民広場＋菊池まちかど広場＋KiCROSS

04. 白川夜市

開会式

熊本市 市街地整備課 課長 上野勝治 氏

平成 19 年から花畑広場だけでなくて桜町の担当を長年させていただいています。今日は上司を差し置いて「ぜひ、私に挨拶をさせてほしい」と伝えて参りました（笑）担当当初から、お役人が発した「広場になったらいいな」を発端に事業が進み、ようやく完成を迎え一生の宝物ができたような感覚です。今年度もコロナ禍で開催できるか不安でしたが、本日は快晴ということもあり、ぜひ青空のなか広場の雰囲気を楽しんでもらえたらなと思っています。熊本市においては 2021 年３月熊本駅白川口駅前広場が完成、４月に JR 九州の商業施設が開業しました。熊本城は天守閣の内覧が始まっています。コロナ禍ではありますが、賑わいがひとつひとつ創出している状況です。本日は、広場研究会を通して賑わいだけでなく交流の拠点にもなればいいなと感じています。またこの地区については、まちづくりマネジメント検討委員会がデザインコンセプトとして掲げる「熊本城と庭つづきまちの大広間」が実現し、2021 年 11 月に供用が開始いたします。2022 年３月～5 月には全国都市緑化くまもとフェアの開催を予定しており、くまもとの「顔」としての多くの方々に知ってもらえる機会になることを期待しています。

さいごに、ご尽力いただいた関係者みなさまに心から感謝を申し上げますとともに、参加者みなさまの健康とご多幸を祈念しまして挨拶といたします。

「だんだんつくる」

熊本駅周辺 都市空間デザイン

１つ目のクロストークの話題提供として星野裕司氏 (以下，星野) から「だんだんつくる」をキーワードに熊本駅周辺都市空間デザインに関する１６年間の取り組みが紹介された。

熊本駅周辺の整備は、連続立体交差事業を含んだ長期的な土木事業であったことから長い時間を要する事業となり、自ずと段階整備の性質を持ったと解説される。その長スパンの段階整備を支えたのは 14 回の都市空間デザイン会議 (以下、デザイン会議)，206 回の都市空間デザインワーキングシステム (以下、デザインワーキング) であり，当初より行政が検討体制をしっかりつくっていたことが整備事業を成立させたひとつの要因だと星野氏は言う[*1]。加えて，各段階で事業担当者が変わるなか，田中智之氏 (以下、田中智)，星野氏，原田和典氏 (崇城大学) の３名が変わらずデザイン会議，デザインワーキングに取り組み続けたことも特徴のひとつであるとプレゼンテーションされた[*2]。

星野氏は熊本駅周辺整備のプロセスは、５期に分けて整理することで概観することが可能だと述べ、第１期に作成したデザインガイドが、段階整備のプロセスにおいて重要な役目を果たしたと初期プロセスを整理する。加えて、デザイン・整備イメージを「パークステーション」とし、「公園のような駅」「駅のような公園」を目指した。デザインガイド作成においては、「景」の概念で、熊本駅周辺の都市空間を捉える手法を開発したことも特筆される内容である。「景」とは、利用者目線の風景を都市空間として捉えていく考え方であり、デザイン・整備イメージは「出会いの景」「木立の景」「水辺の景」の３つの「景」を基調とした構成になっている。

第２期ではデザインガイドの内容を基に、新幹線開業に向けたデザイン・整備が進められた。「だんだんつくる」うえでは、第３期に該当される新幹線開業後の整備は重要なタームであった。デザイン・整備の結果には多少なりとも不都合が生じてしまう。それに対して、距離をとらず都市デザインワーキングのメンバーが一貫して “ アフターフォロー ” に努めることが重要だと述べられた。第４・５期と事業の長期化に伴い、熊本地震や政治的判断など複雑な事業調整が発生した際に、田中智氏が描く “ タナパー ” のような一枚絵の存在[*3]が大事であったと指摘し、５期のプロセスが解説された。

さいごに「だんだんつくるとは、ビジョンを共有しながらみんなでつくる」とまとめ、熊本駅周辺のデザイン・整備は「だんだんつくる」ことでいろんな要素が溶け合うようにできていると１６年の取り組みを振り返った。

場所とイメージをいかにつなぐのか

北原啓司氏 (以下，北原) :

話を聞いて感じるのは、まちの動きを考えることに１６年間関わっていた方々が変化しても、根幹のイメージを共有し続けている。これは羨ましい話だという気がします。

田中智さんの描いているタナパーは “ そのときの意味 ” でつくられていったものを投影して、皆さんでの共有を可能にしている。でも、その通りにつくらないことも受け入れ、適宜修正可能なものとしての指標にもなっている。「今の感じはこんなものだね」っていうのを、確認できるまちづくりの進め方は、実はそんなに多くないと思うんです。それが「だんだん」なんですよね。

例えば、僕は八戸中心市街地の仕事を２０年やってます。最初の頃は何回もメンバーが変わりながら、「みんなが集まる場所をつくりたいね」っていう話をやっていった。いろんなことをやりながら、やっと完成したのが 2011 年２月 11 日で、ちょうど 3.11（東日本大震災）の１ヶ月前だったんですよ。震災前に市民を巻き込んで色々やっていったおかげで、地震が起きた時に「はっち（八戸ポータルミュージアム）」にみんな集まれたんです。それは、もしかしたら「困った時に行く場所」だというイメージがあったからだと思います。最初にタナパーみたいな１枚絵があるとよりイメージが育ったんだと思うけど、田中智さんのような人はいないもんで。

星野：田中智さんのような人はなかなかいないですよね（笑）。

北原：普通はいませんね。そういう場所のイメージを共有できる手法は必要だと思う。「何かあったらそこに行こう」というところから八戸のまちづくりは始まったので。

震災後、まちなか広場研究会をやるのにちょうどいい「マチニワ」っていうのができました。そのマチニワでどんなことをやろうっていう話をする時に、まちなか広場研究会の山下裕子さんをワークショップに呼んだ。僕と山下さんでワークショップを進めて行きながら、「広場って言ってるけど、この空間って建物の中のような気もするし、好きなことやって良い気もするし、公共の空間ってなんだろう。」みたいなことを、当時真面目に議論しました。当時の議論で印象的だったのは、「そういう空間でお酒飲んで良いんでしょうかね」っていう話を真面目に聞かれたことがあったんです。「何が悪いんや」って思ってたけど、真面目だから念のため「富山どうした？」って山下さんに聞いたら、「とりあえず飲んでもらって大丈夫です！」って言われました（笑）。富山のまちなかでは、いつもおじちゃんが１人で呑んでいて、１杯目までは何も言わないんだけど、２杯目を呑み始めたら「お父さん、今日二杯目だよ！」っていう周囲の人が気にかけるコミュニケーションがあるらしい。お酒を飲んで過ごしている人も、みんなで見守ってあげることで、阻害要因ではなく「そういう雰囲気って大事ですよね」っていう文化になる。その言葉を聞いて、八戸はお酒をOK にしたんですよ。ここだけの話ですけど、開設した日に一番最初にビールを飲んだのは僕と館長なんです（笑）。「飲んで良いよね」っていうのを見せるためにやったんです。

「だんだん」を考えることができるのは幸せ

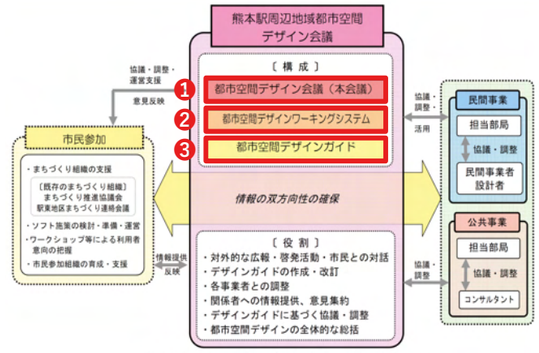
北原：形や空間なんかを考えていくときに、シーンを作って見てもらうしかありません。熊本の話で羨ましいと思ったのは、「こんな形になっていくね」っていうのをコンサルティングやコンペの決まりきった絵じゃなくて、常時変わるデザイン・整備イメージを絵にしているところ。「だんだん」関連で話すと、去年市役所の方に連れていただいて熊本城に行きました。全部見終わったあとに、「工事大変ですね、いつ完成するんですか？」っていう話をすると、担当の方が「全部終わるとしたら２０年かかります、僕はもうやめてます」と話をしてくれた。城下町で復興事業を語るときに、２０年っていう時間の長さを喋れるのは、僕はすごいと思うんですよ。例えば被災した地域で仕事をしていると、１０年間でエリマネをやらなくちゃいけないことが多いんです。１０年間って言っても、最初の１年２年でやっと片付けが落ち着いて、残りの７、８年で急いでやることを想定すると、「だんだんつくる」というのができないわけです。でも、真面目にいろんな人と議論していると、「だんだんつくって欲しい」っていう議論が出てくる。でも、予算の都合もあって、「何年までにやらなくてはいけない」「復興庁もやめにする」みたいな話になってしまう。２０年間議論しながら、そしてそれをただ形だけ、口だけじゃなく見せながらつくれる熊本は幸せだと思います。その幸せを共感できる熊本の事例はものすごく参考になるし、それはなかなか珍しい話だという気がしました。

上から見るのではなく、シーンを考える

北原:僕はよく思うのですが、計画図やゾーニング図をつくるときは、いつも上から見て色塗るわけです。だから、中心市街地活性化基本計画を町がつくったときに「頼むから、上からの視点でつくる配置図をやめて、どう見えるかを共有するシーンを描いてくれ」という話をするように心がけています。そうしないと人の視点が入ってこない。熊本駅周辺の計画を聞いているときに、シーンで考える計画のありがたさを感じました。そのうえで、あの絵（タナパー）はすごく強いと思うんですよ。それを行政側で任せっきりになると、どうしても上から見て、「ここら辺がね」っていう話に落ち着いてしまいますよね。

大きな広場を整備していく時に「景」の考え方が、裏通りも含んだまち全体に絡むので参考になると思いました。２０年っていう歴史を経ながらも、その時々に拠り所になる絵があって、それをシーンで少しずつつくるっていうのは面白いし、ありがたいと思います。

もう１つシーンで考えると、星野さんが説明されたキャノピーの場所なんですけど、例えば青森の駅前で新しい広場をつくる時に、駅の中に入り込む形でキャノピーを作っておかないと、雪の時に途中で困っちゃうわけです。その話をすると、JR の方が「先生の仰ることはわかりますが、ここまでが JR の敷地、ここが青森市の敷地で、こっちは国の敷地でございます」と説明する。当時、僕が出た会議がバリアフリーの会議なんですけど、「そのバリアが１番の問題じゃないですか」っていう話をしたんですよ（笑）。バリアフリーというと、身体が不自由とか、人の話を考えるかもしれないですけど、もっと空間も含めて考える必要がある。「景」で解く都市計画っていうのは、それを一歩踏み込んだ「このシーンはこう見えているけど、誰の敷地？」っていう話が生まれるところが面白いんですよ。それを配置

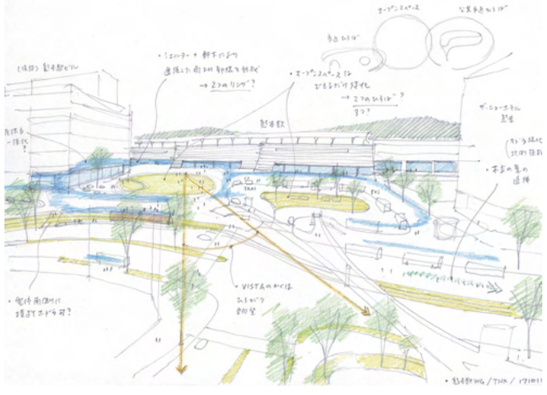


***1 デザイン調整の体制とデザイン会議の役割 仕組み図**

○出典：「熊本駅周辺地域都市空間デザインガイドの概要」(熊本市)

***2 デザイン会議に参与し続けた３名**

○写真左から、原田和典氏、田中智之氏、星野裕司氏



***3 デザイン会議で描かれた「タナパー」**

○「タナパー」とは、「タナ」カさんの「パー」スの略称

図でやっていくと面白くもなんともない。そんなことを熊本駅の話しを聞いて感心しました。ありがとうございました。

星野：ありがとうございます。改めて、時間をかけられる豊かさを感じることができました。

北原：それって、幸せなことだと思います。被災地では時間が限られているわけじゃないですか。そこでも頑張っていろいろやってきているけど、１０年経つとみんな終わったみたいなことを言うので僕は怒って「まだ１０年目ですよね、まだ途中じゃん」って言うんです。担当者は、「復興庁も終わるし、終わった」っていう話で…（苦笑）

まちづくりっていう言葉を言っちゃうと、できたら完成すると思っちゃうんですよ。熊本駅で言うアフターフォローのように続ける話しが大事で、僕はつくるより育てる方が重要だと思っている。そう意味からすると、まさにまちづくりは「だんだん」が大事。「だんだん」って聞くと、西日本の方言でありがとうっていう言葉をはじめに想像しました。熊本は「だんだん」と段階的なことを意識しながら「ありがとう」を連呼してつくっていく、面白いね。

星野：「だんだん」と「ありがとう」のお話は、セッションの最後の締めに話してくれたら、一番綺麗な終わり方になりましたね（笑）。

振り返ると、シーン・景で考えるっていうところが検討初期に立ち上がったのが大事だったんだなと思うんです。一方で、行政の方もすごく苦労していた。例えば、キャノピーが入り込んでいる写真[*4]がありますけど、駅ビルの軒先までは駅前広場の敷地にしてるらしいんです。その駅前広場を施設が借りる仕組みをとっている。有り得べき形みたいなのをワーキングで模索していて、仕組みとか線引きとかを後から整合させてくれるというのをすごく頑張ってくれた。

北原：そうですよね。位置づけの工夫を行って、こっちはそのための空間として扱って成立するわけじゃないですか。近いのは、東京の墨田区あたりの天水桶。一般家庭の敷地に天水桶を置かせてもらって。その分の固定資産税はカットする仕組みがある。そいう事例もあるし、最近だと、電信柱立たないような狭い道路で、人家の庭に立てるやつもあります。そういう意味で、所有権じゃなくて、本当の利用の仕方を考えるときに、「シーン」「景」で見て行くと、多分その方がいいよねっていう話がわかりやすいのかなって思いました。

有り得べき姿としての「景」

星野：今日は、苦労している市役所の担当の方が来られているので、少しお話を。有り得べき姿を決めたあと、アフターフォローしてくれたと思います。その苦労話しや思いなど聞かせてもらえますか？

*4 駅ビルに入り込むキャノピー

熊本市 平田氏 (以下、平田)：

熊本市の市街地整備課の平田です。私が熊本駅に関わったのは３年間。デザインワーキングとしては終盤の30～40回で、私が関わったときにはすでにキャノピーの形を検討している段階でした。そのときは、デザインワーキングの中で、熊本市だけではなくて、JR九州の方や、各事業主体が参加されていた。

私が参加し始めたときから、各事業主体のみなさんが目的を共有していたと思います。キャノピーの入り込みは１つの好例ですけど「どうやったら利用者に便利か」をみなさんが共有していたから仕組みについては後付けで取り組めました。目的を達成するためにどうするかというプロセスが良かったんじゃないかなと感じたところです。

星野：全ての事業でそうやってほしいけど、それをできない方が多いですよね。なぜ熊本駅周辺はできたと思いますか？

平田：熊本県が担当していた段階からデザインワーキングは開催されていました。それが続いたということは、行政や市民の目線からも、議論されている内容・目的、考えることが一致していたんじゃないかと思っています。その継続を行政としてもきっと必要と思っていて、そういったところが大きかったんじゃないかなと思います。

星野：時間を積み重ねる豊かさみたいなのが、行政あるいは市民目線でも積み重なってきたからってことかな。

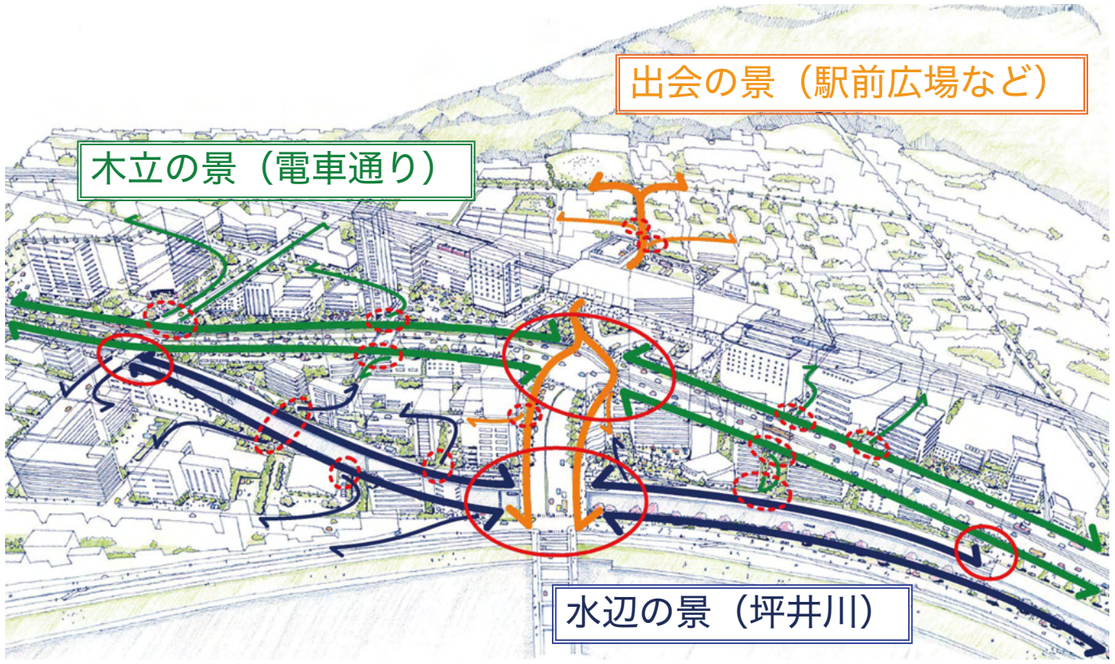
北原：そうですね。デザインの目標をたくさん絵に表すことで、「境界をなくすようにしようとか」「調整しようとか」そういうプロセスなんだとみんなで考える。平面図だけで描くと、間違いなく敷地のへりまで絶対はみ出しませんよ。シーンにすることによって当たり前の見識になるじゃないですか？そのイメージは大きいですよね、絵の強さはそこだと思うんですよ。

星野：まさに「景」というところはありますよね。では、景を描きまくった田中智先生コメントお願いします。

田中智：是非、現地に行かれる人に見ていただきたいのですが、先程のシェルターと駅ビルの重なりに加えて、広場北側に位置する家電量販店が入っているビルが、あまり見たことがないような広場との接し方をしている。駅前広場にビルがドンとぶつかっていて、普通は地先境界ブロックや敷地境界の管理区分の明示化などで処理してしまいますが、駅広の舗装がドンとぶつかって終わるという漫画のようなことになっています。そういったことがたくさん積み重なることで、絵やダイアグラムに描いたような理想的な状態につながっています。その状態によって、余計なものに目がいかず「緑」や「電車」といった本来の目的となるようなものが際立つ。それは絵の力だけではなく、北原先生にも言っていただいた、「マインドの醸成」をワーキングでもしつこく話し合ってきたからだと思います。行政の方が２、３年でどんどん担当が変わっていくなかでも、「どうやらこういう考え方があるらしい」と担当者間で引継ぎが行われていったのはないでしょうか。

泉 英明氏 (以下、泉)：

15年前というと星野さん、田中智さんは30代半ばですよね。その15年前に、デザイン会議とワーキングシステムをつくっている。「景」は後から開発されたのかもしれないですが、通常であれば「この公共工事の、ここの設計をお願いします」っていうのが一般的だと思う。熊本駅周辺空間はすごくザクッとしていて、要は公共工事だけではなくて、隣の再開発や先程の民間マンションや店舗まで視野に入れている。「なぜこの人達に口を出されなければいけないんだ」と思われそうですが、おせっかいで周辺に色々言っていいよ的な状況が生まれているのが凄い。



：「景」という都市空間のとらえかた

泉：それともうひとつ、30代の人に普通任せないと思う。普通はどこかの土木デザインのコンサルタントやデザイナーに任せるのですが、「これは長く続いていくから30代の君たちがやれ」と言った人がいる、それが奇跡的ですよね。

田中智：両角先生の存在が大きいです。せっかく今日参加されているので、ぜひ両角先生にお話伺ってみたいと思います。

“ パークステーション ” はいいスタートだった

熊本大学名誉教授 両角 光男氏 (以下、両角)：

皆さんには、16年間ワーキングに努めていただきました。ワーキングができる半年前頃から会議体をつくっていて、当初そこにいたのが私と日大の岸井隆幸先生ですね。県の方から相談に来られた時にちょうど田中智先生が熊本大学に赴任されて、パースに魅力を感じて熊大に採用した。県にも「こういった人に絵を描いてもらいながらやった方がいいよ」と助言したところ「そうか」と言ってやっていただいた経緯があります。

星野先生は楽しいところだけを話していましたが、15年の間には色々紆余曲折がありました。トップの方からの声があって、それを上手く取り入れながら、変えながら現代に至った。そのうえで、最初の “ パークステーション ” という考え方はいいスタートだったと思います。次に、当時の市長さんから「全国一、乗り換えが便利な駅にしたい」「市電を駅の中に引き込んで改札を出たらパッと乗れるようにしたい」と言われて、「ああ困った」と頭を抱えたことがありました。最終的には広場に市電を入れることは交通安全上無理だということで諦めていただきましたが、３年か４年くらいその議論をやっていました。

それから西沢立衛先生 (以下，西沢先生) 設計のしゃもじ (旧熊本駅前広場キャノピー) がアートポリス事業でできて、あれ自体が雨の問題があるとか、防災広場をつくりたいという話が出て、どうするかという大議論があった。最終的には、もう一度西沢先生に新しい案を作っていただこうということで、現状の軽やかなものになりました。

：「出会の景」（デザインガイド）

：「出会の景」（完成形）

１６年という期間は、そういった大きな課題をみんなで議論しなが

：整備前の熊本駅 (2005 年)

：新幹線開業時の熊本駅 (2011 年)

：整備完了後の熊本駅 (2021 年)

ら少しずつ変えて、良い方向に持っていっている、そういう時間だったかなと思っています。１６年というのは、元々工程で決まっていたけれども、そういう時間があるからじっくり議論しつつやれた。その辺が良かったのかなと思っています。そのために、ワーキンググループのメンバーが 206 回苦労された。終わりよければすべてよしだよね (笑)。

星野：両角先生ありがとうございます。泉さんの質問でありましたが、システムの設定として二層になっていたことがとても大事だと思います。熊本県あるいは熊本市にとってもすごく大きなプロジェクトだったので、政治的なことも含めて非常に影響を受けますよね。ワーキンググループだけではダメで、まず上の層があり、大きな条件変更の中でも持続しているからこそ、形は変えながらもやるべきことをやってこれた。

熊本駅周辺整備での実践は波及可能か

泉：二層構造というのはすごく参考になりましたね。あと、普通だったら土木のコンサルタントとかがやりますよね。それを大学教員がやっている。それは仕事でやっているのですか、それともボランティアですか。あれだけのスタディは相当な作業だったのではないかと思うのですが、それを例えば全国にこのシステムを波及させようと思ったときに、どうすればいいのか。大学の先生を捕まえるということなのか、プロのデザイナーや事務所でもそういった地位になれば継続は可能なのか。

田中智：グレーな話をしますね (笑)。土木コンサルはもちろん参加していました。土木コンサルが全体の基本計画を設計するというのを受け、かつ柔軟に取り組んでくれていたんですね。もちろん全体の特記仕様書に書かれていることなどはやるのですが、例えばその一部の広場だとか、市電の電停だとか重要なものがありますよね。そういうものは部分的に、大学側に「デザインしてください」と言うようになっていました。簡単に言えば下請けですね、その分の料金もいただきました。ですから僕らは、コンサルとともに全体計画についてはアドバイザーとして絵を描き、整えていきながらも、その主要な広場だとか電停というものはしっかり責任をもってデザインする。これも二層構造といえば二層構造ですね。その構造は参考になるかもしれません。

泉：発注者がある程度意識を持っていないとできないですよね。

星野：そうなんですよね。ただ本当はもう少し考えないといけないなと思うのが、例えば僕らが 30 代のときに任されたように、若手のデザイナーとかがもっと大っぴらに仕事が取れるようになってほしいな、というのがあるんですよね。そこらへんはまだシステムとしては少し過渡的な部分はあるのかなとは思っています。

田中智：そこは少し自作自演なシステムというか、気持ち悪いですよね。

泉：今のその枠組みの中では最大限取り組んでいるということですよね、ただ改善の方法が何かあるかもしれないってことかなと思います。

あともう一つ、北原先生もおっしゃっていましたけれども、「景」っていうのは素晴らしいなというか、上手い言い方。色んな人達に話を振っていけるという気がする、例えばマンションやオフィスビル、JR に話を持っていき、絵を提示する際に「こんなのがいいんじゃないか」って共有するところまでは分かるのですが、相手側はクライアントでもないし、聞く必要もない。それを「景」という考え方で、土木だったり建築だったりランドスケープだったり、全体を含む考え方として提示したことが妙案。

「景」という考え方を周辺の人たちに納得をしてやってもらう時に、どんな心持ちだったのか伺いたいです。先方に対して、どういうふうにやったらこんなふうに進むのかは凄く興味がありますし、そのプロセスが素晴らしいところなので。

星野：田中智さんからもお話を聞きたいんですけれど、まず僕の方から。まずは、ワーキングのような相談窓口の場があるのが大前提ですよね。最初の関門は、まずその場に来てくれるか、だと思うんですよね。おそらく、市役所や県からのなにかしらの働きかけがあったんじゃないかと思います。それが１番大きな関門で、来てくれた後は「来てよかった」と思ってもらわないといけない。例えば「外構が元々考えていたものよりも良くなったな」とか、そういった実感を持ってもらえるようなアドバイスや話し合いをするというのは、僕個人としては心掛けていました。

田中智：それも段々上手くなってからの話であって、最初は大変でした。最初は「お前らどんな権限があってこんなことしてるんだ」と言われていました。僕も調子に乗って絵とか描いてしまって、あるプロジェクトでブチギレられた。それで、こちらから一方的に絵を描くというのは相手からすると「なんなんだ」という話になってしまうことを学びました。先程、星野さんが言っていたのは中期くらいからで「まずは話を聞こう」「相手が考えていることを上手く聞き出す」まさに聞き上手であることが大事。「何かお困りのことはありませんか」というように聞くと、結構言ってくださる。「色が決めにくいよね」とか「部長はこう思ってるけど現場は違う」とか結構仲良く話せるようになって、そこでようやく「こちらとしては ...」というように提案して、「確かにそういうのもありますよね」と段々共有できていった。民地とか周辺事業者さんに対して、あまりこちらから絵を描くというのは流石にしないようにしていました。

泉：タナパーがあえてタナパーを描かないことが、議論のスタートになっているということですね（笑）。

星野：そこら辺もいわゆるマスターアーキテクトみたいな、誰か偉い先生が全部見るという感じではないことの効果かもしれないですね。近くのお兄さんの様な感じで、相談できたりとか、一緒に考えられたりとかそういったところはあると思います。

北原：そういう偉い人達がいると「だんだん」できないんですよ。一気にこうだ！となってしまうんですよ。そういう絵を見ながら「だんだん」考えることがいいんですよね。

田中尚：まちづくり側からすると駅って、一般の人から遠い気がします。だから「誰かが上手いことつくってくれたらいいよね」となってしまうのですが、田中智さんや星野さんのチームが面白いのはどんどん人を巻き込んでいくところ。周辺の方々は、興味がなければ文句は言わない訳です。「こんな場所になったらいいな」という文句を上手に引き出して、田中智さんのパースに置き換えていく。「だんだん」駅前空間というのを誰かの場所から自分の場所に意識を変えて、関心を持ってもらうというのが凄く上手だと思います。それはもしかしたら行政の皆さん、一般の市民からはまだまだ遠いかもしれませんが、「あれは土木がやっているのね」、「建築がやっているのね」という行政の方が従来もっている領域が「だんだん」曖昧になっていると感じがしました。みなさんが自分事化していくというところで、絵が効いてくるのかなと見ていて思いましたが、そういったものはお二人は意識してやっておられたんですか。

田中智：意識してやっていましたが、課題だらけですね。僕らの駅の反省はそこにありますよね。やっぱりうまく市民にとって自分事として巻き込みきれませんでした。それは駅が物理的に遠いというのもあるのですが、あとは発信の仕方、それらは僕らのチームではやりきれませんでした。先程のスケッチなどは、本来どんどん発信して、ご意見を聞いていたら、もっと自分事の駅としてできたなと思います。

星野：「だんだんつくる」というのが狭い意味ではできたと思うのですが、育てるとかというのはまだまだです。

泉：今でも十分触り代がありそうな感じを受けました。これから色を付けることもできますしね。

半田 満氏 (以下、半田)：

敷地内だけでシーンを見ることは割と建築でも多いと思うのですが、まちになるとどうしても航空写真を引っ張ってきて上からみることが多い。それを「景」の考え方で捉えるのはすごくいいなと思いました。周りの行政の方とか、今日話されている方々がすごく仲がいい。大変なことがあったと思うのですが、それでも仲良くされていることが一番周りを引き付ける要因になっているのではないかと聞いていて思いました。

：模型を使った住民ワークショップ

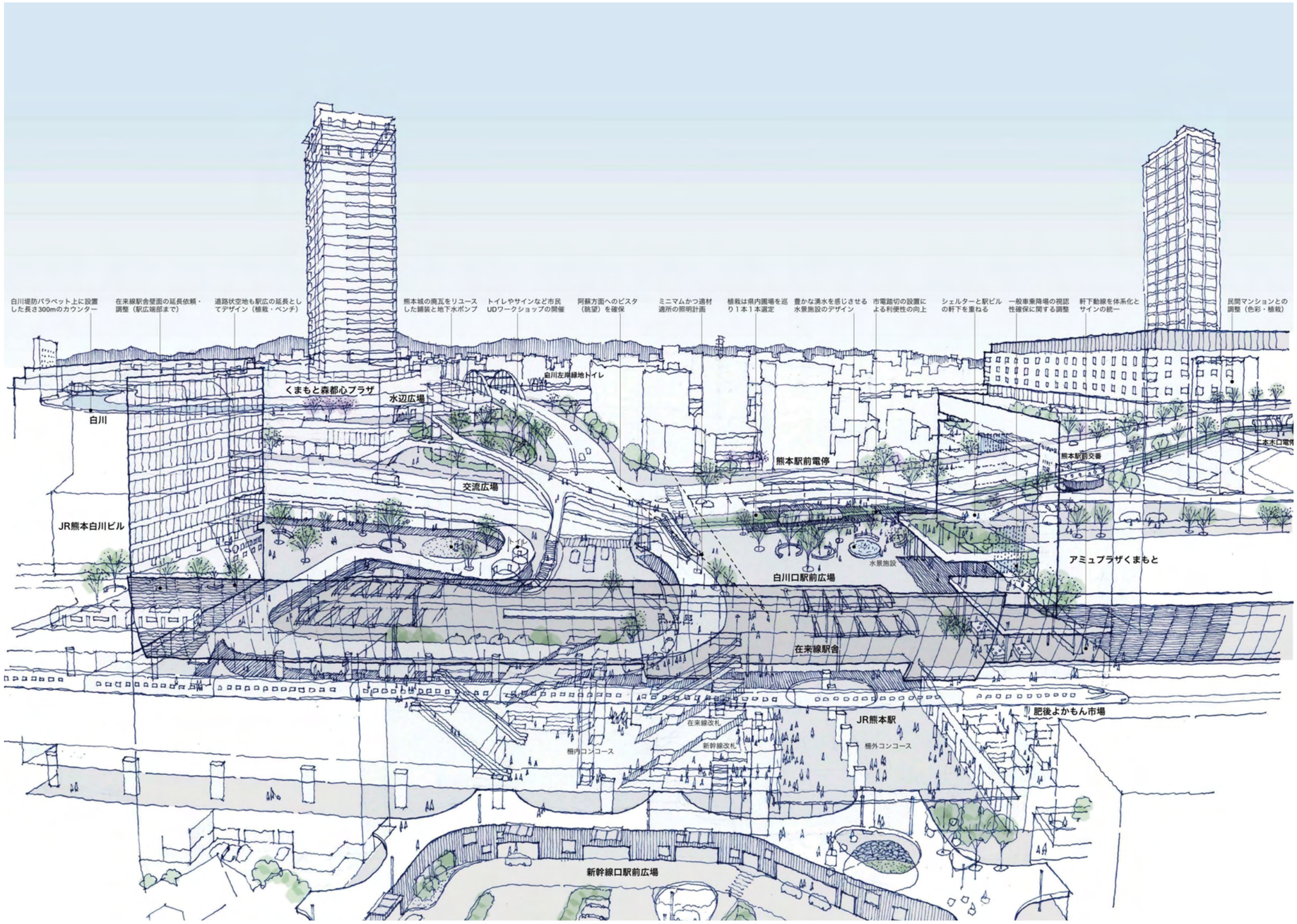
：現場でのアフターフォロー

：駅前広場の樹木を県内各地にて選定

敷地内だけではなくてスーパーやマンションにも波及して、共通のシーンを目指すように思えたんですが、そこにはルールがあったのか、話し合いのなかで生まれたのか、気になりました。

星野：景観計画に基づいた考え方は多少ありますが、話し合いの中で、「ポールはダークグレーにしましょう」とか、既存のルールは共有していました。でも、話し合いで見つけていくという印象が強かったです。

田中智：デザインガイドというものをつくっていたので、それを市役所の窓口がちゃんと認識していて、建築指導課とかに新築の相談に行く際に、きちんとアピールしてもらっていました。それから建築指導課から駅周事務所に一報入ると、「ちょっと相談に行きましょうか」みたいな仕組みがあったというのはありますね。



左図：熊本駅の俯瞰パース[*5]
作画：田中智之氏
当日の会では星野氏のプレゼンテーションにて掲載。色々な要素が時間を掛けることで，要素同士が溶け合った状態が表現されていると紹介された。

*5 新建築 2021 年 9 月号 記事「パークステーション 熊本駅周辺地域都市空間デザインの 16 年」に田中智之氏の論考が掲載されている。

北原：城下町は全国そうなのですが、お城を中心としたまちと、新しくつくられた駅の場所というのがどうしても阻害要因になります。桜町でデザインガイドをつくると「どうお城が見えるか」とか「軸」とか、すごく気にするものがある。一方で、駅の場合って拠って立つものがないんですよね。私の場所と思わせるためには、何を意識させるかという意味で、全員を共通で考えるの難しい。そういう意味で言うと、みなさんを巻き込んでよくやったなと思います。

例えば桜町周辺だと、「ビルが建って、お城が見えなくなった」とか多くの人が気づく自分の場所なんですよね。でも駅って、みんな行く割には私の場所的ではないですよね。そのデザインはすごく大変だったのではないかなと思います。

星野：桜町周辺のように、分かりやすい大事にしないといけない景観とかがある訳ではないんですけれども、過ごし方とか居心地に大事なところをみんなで目指す、「パークステーション」ってそういうことだ思います。

田中智：あとは 16 年かけてやってきたので、市民の方も整備前の姿から「だんだん」変わっていくのをずっと見ておられた。整備後のあの姿にいきなりなってしまったらみんな驚いてしまって、それこそ取り付く島がないことになってしまうと思います。暫定整備の時でさえ、「前の駅前とは全然違うことになった」とか驚かれました。それを聞いて、「まだ暫定である」という整備状況を伝えながら、しゃもじの見直しとかがあったと思います。そういった状況を皆さん目撃されながら、自分達の駅が出来て来たと思っていただけたら長い時間をかけた意味があったのかなと思います。

クロストークレポート

「都市計画は景で考えることで空間的・組織的にバリアフリーになる」

この言葉は特に、駅ビルにキャノピーが入り込むなど連続的なデザインが特徴的な熊本駅前広場を事例としている。では、「景で考える」とは何か？「景」を英訳すると、view や scene、vista といった視覚的な都市景観にまつわる単語を思いつくが、「考える景」となるとそれは image であろう。かつて Lynch は著書『都市のイメージ』におい imageability（意訳すれば、都市のイメージのしやすさ）を論じた。曰く、都市の環境は視覚的に分かりやすい方が望ましく、それは同時に、人々の心の中で都市の姿がイメージされやすいということを指す。そして人々が都市を視覚的に捉え、イメージする際には、「パス・ノード・エッジ・ディストリクト・ランドマーク」の 5 要素がカギとなるという。これは都市計画分野において普遍的な理論として今日でもよく参照される。言われてみれば、あのタナパーにもこの 5 要素が程よい抽象度で描き込まれているように感じる。社会学者の南後由和は、この 5 要素に加えて、現代では「メディア上で流通するイメージの量」という 6 つ目の要素が存在することを指摘した（南後由和ら『商業空間は何の夢を見たか』）。つまり、Google 画像検索で “ 渋谷 ” と検索するとスクランブル交差点の写真が上位に並ぶように、HP や SNS に湯水のごとく流通する画像が都市のイメージ形成に少なからず関わっているという。この考えは特に来街者に当てはまり、インスタ映えのする写真スポットが注目を集める昨今の観光業のように、空間の体験よりも写真の撮影と共有という 2 次元的情報のやり取りが目的化した消費文化が大衆化している。故に、表層的なデザイン装飾に走り、観光スポットとしては一時的な流行に乗るものの、果たして文化が醸成されていくような持続可能なデザインなのかと首を傾げてしまうような観光地も散見されるのが現状である。景観十年、風景百年、風土千年という言葉がある。景観が形成されるのには 10 年、それが風景として育つには 100 年、それが風土として根付くには 1000 年かかるという。風景や風土がつくられていくようなデザインとは、熊本駅前で施された工夫のように、SNS 映えとは縁のないような「さりげないデザイン」であろう。そのような設計が、空間的・組織的なバリアフリーという持続可能性をもたらすことを実感した。

文責：東京大学大学院 空間計画研究室 岡田潤氏

桜町花畑周辺地区まちづくりマネジメント

２つ目のクロストークでは「よかとこつくる」の話題提供として田中智之氏から桜町・花畑周辺地区まちづくりマネジメントの取り組みが紹介された。田中智氏は 2009 年より「桜町・花畑地区まちづくりマネジメント委員会」の一員として MICE の基本計画に参画し、周囲の広場やビルまで含んだマネジメントを目指した再開発の計画プロセス、実施・監理に携わった経緯を持つ。

再開発該当地区には、日本最大級のバスターミナルと言われた旧熊本交通センターが位置し、前面道路をバス通りとして整備していたため、歩行者に優しい空間にはなっていなかったと解説[*1]。加えて、バス通りだった道路は、江戸時代から昭和初期まで「広小路」として設えていた歴史があり[*2*3]、熊本城に接続する街路だと再認識することの重要性が述べられた。その認識によって、空間が持つ歴史とエリアの課題を紐付けるきっかけになったと初期のプロセスを振り返る。

花畑広場の特徴の１つに幅 27m、長さ 230m の巨大広場を「シンボルプロムナード」と称したうえで「広小路」の歴史を重ね、「ハレのにぎわいとケの居心地を両立」するオープンスペースの配置を基本計画としてまとめたことが挙げられる[*4]。かつ、ビジョンを整理するだけでなく、エリア内にある産業文化会館跡地を (仮称) 花畑広場[*5] として暫定的に位置づけ、マネジメント委員会で利活用方法を実践しながら広場の雰囲気を醸成していった。また、市民コンペでアイディアを募り、開発された「くのいす[*6]」による広場利活用の検討もユニークな取り組みだったと紹介され、「広場をつかいながら，まちづくりマネジメント組織も育てる」意識が重要であると指摘された。

田中智氏は、「よかとこつくる」ための広場全体の考え方を、「全体性」と「多様性」の両立を目指した視点で整理する。２つの事象は本来両立することが難しいと考察したうえで、再開発エリアのオープンスペースを「熊本城と庭つづき・まちの大広間」として解く。大広間に見立てられたシンボルプロムナードはまちの賑わいを受け止めつつ、ときには熊本城への眺望を示唆する構成も備えていることを実空間を以って示された。さいごに、花畑広場が持つ最大の特徴を「日常の楽しみのある場所と、回遊性を上げる性能を併せ持つ場」とまとめ、その可能性が述べられた。

田中智：「よかとこつくる」の話を受けて、まずは泉さんにコメントいただこうと思います。

泉：以前、整備途中の花畑広場には来たことがありましたが、今日来てこんなに変わっていることにびっくりした。「くのいす」(2015) などの実践の際にも、全体のイメージを考えた中でいろいろな実験をしていたことがよくわかりました。あまりにも変わっていたので、こんな変わり方をするんだと思いました（笑）。以前、ここには暫定的なバスターミナルがあって、花畑公園も誰も使っていないような感じでしたよね？なので違うところに来たんじゃないかと（笑）。

官民を乗り越える空間の仕掛け

泉：合せ技なのかな？民間と桜町・花畑周辺のデザインを一体的にやることで、この公共空間が行政だけでつくられたスペースになっていない。例えば、道路を廃道して広場に置き換えたりとか、民間の敷地も一緒に考えているとか、そういう印象を受けます。

田中智：この広場は当然、公共用地ですよね。広場の幅は 27m で、2m ずつ民地側でセットバックをお願いしています。民地側のセットバックを含めて 31m の幅を、「官民協働でつくっていきましょう」というのがまず大きな考え方です。

泉：公園やゲートもセットっていうことですよね。建物へのデザインの整合性とか、「お互いこういう風にしましょう」みたいなこともやってきたんですか？

田中智：そうです。初期の基本計画をつくる際に、周辺建物の在り方みたいなことも一緒に議論しました。日建設計が基本計画について一緒に考えてくれたのですが、最終的には、「サクラマチクマモト」や「花畑広場」も日建設計が仕事を受けたので、事後的ですが。この連続性はすごく良かったと思います。

初期の頃に、２階３階までの低層部はセットバックしつつも賑わいが表出するイメージを「襖絵」として共有していました。「後ろを望む景観として熊本城があり、両側の襖絵として建物の低層部が絵になるということをやりましょう」と。加えて、「高層部はあまり高いと圧迫感が強くなるので、段々引いていくような感じがいいですよね」ということ議論していたので、丁寧にやってくれたと思いますね。最初の議論が良かった。

泉：その状況は熊本駅の話にも似ている気がする。官民を乗り越えたりだとか、道路と公園を乗り越えたりだとか、そういうことを当たり前として取り組む。この場所でもそのやり方が最初から取り入れようという雰囲気になっていたってことなんですか？

田中智：熊本駅からの連続した取り組みとかでは無かったように思います。「官民協働で新たなオープンスペースを目指しましょう」ってというのは、初期の頃からこのまちづくりマネジメント委員会で、会長の蓑茂壽太郎先生たちと議論している際に、そういう話になりました。

星野：二層構造になっているのは一緒かもね。マネジメント委員会というオーソライズする委員会と、部会という形式で担当者レベルで議論できればというのはありました。

泉：それは経験値となって活きている感じですね。熊本のまちづくりの常識になっていますよね。

「全体性と多様性」を整える共感のプロセス

泉：あと聞いていてなるほどと思ったのは、熊本城下にあった広小路のつくり方にヒントを得て、そこを通り庭にしてしまおうという考え方。共感をすごく得れるようなプロセスは大事だと思います。先ほど、「お城の方が共感を得やすい」と北原先生はおっしゃってましたけど、そういう大きな考え方って大切ですよね。

田中智：駅と違う点は、歴史をどう踏まえるかというのがテーマにあったところです。最初の議論の頃は、“ 和 ” の感じにすればいいんじゃないかという話が多かったんですが、そうするとテーマパークというか、作り物というか ...「表面的になってしまうよね」いうことを議論しました。もう少し市民と広く共有できるビジョンやイメージを、歴史を踏まえながら共有していく必要があって、そのうえで「広小路」は良かったんじゃないかと思いますね。

でも、これにもいろいろありました（笑）。例えば、「桜町・花畑周辺地区まちづくりマネジメント検討委員会」というのがありまして、周辺事業者さんたちや、市長とか行政の人が集まって議論する場があります。そのなかで「広小路のアイディアは良い」と議論されるのですが、まちなかにはやっぱりいろんなお祭りなどの既存のアクティビティとかあるわけです。加えて、熊本城マラソンのゴールにしたりとか、いろんな方の思惑があるなかで、ここをすっからかんにして何もないようなスペースの方がいいのではないかという想いを持たれている方が結構いらっしゃった。その意見のひとつとして、東京駅前のように、熊本城もフォトジェニックで目立たせたい！という話がありました。でも、これだと取りつく島がないというか、魅力的な場所になりにくいと思います。やはり、ヒューマンスケールの場所がうまく共存していくことが大事で、その考え方への合意を得るのが大変でした。

泉：ポイントだと思ったのが、プレゼンテーションにもあった「全体性と多様性」の話。ヒューマンスケールの居場所づくりと、領域づくりっていうのは、僕も別のところで同じような議論をしました、「どっちがいいか」って。日常は非常に大切だけれども、やっぱり椅子とかも必要。何もやらない自由な空間に置いておいた方がいろんな使い方ができるっていう話は必ずありますよね。

田中智：委員会の時とかにいい例が提示できれば、「こういう場所ですよ」っていうことを示して、みんなが「そういうことね」って共有しやすいんですけど、残念ながらあまりないと思います。どっちかなんですね。それが一番の産みの苦しみと言いますか、大変なことでした。

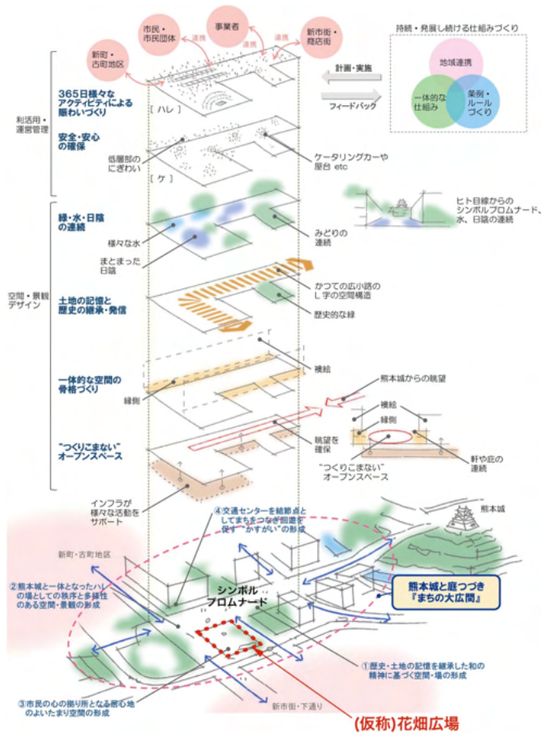
泉：そこを実際にデザインして実現したっていう考え方だとしたら、全体の舗装とか、27m の構成に加えて、こういうランドスケープをつくるってことになるんですね。

田中智：本当は、ヒューマンスケールを持った緑地帯とかはできそうになっていたんです。僕が建築の人間ってこともあるんですけど、東屋っていうのかな、うめきた広場（大阪府大阪市）にもあるビールが

***1 整備前の再開発該当地区**
○出典：http://march742.web.fc2.com/buskumamotokotsu.htm

***2 熊本城城下町を復元した模型写真 (江戸時代)**

***3 昭和初期の桜町・花畑地区**
○出典：https://smtrc.jp/town-archives/city/kumamoto/p07.html



*4 シンボルプロムナードと花畑広場の空間構成

*5 産業文化会館跡地に暫定的に設えた (仮称) 花畑広場

*6 オリジナル家具「くのいす」

飲めるようなフォリーと言いますか、ああいうのがいくつかあるといいなと思っていました。何もない時は日陰があるから休憩できたり、イベント時にはちょっとステージになったり、時にはキッチンとかがそこにあるといいなと僕は思ったんだけど、そこで食事つくってみんなで楽しむとか、ユーティリティの高い小建築があるといいなと。

熊本城は皆さん見てお分かりかと思いますが、通常のはしご状・塔状の櫓と異なり、熊本城のやぐらはそれが横に寝た、長屋みたいなやつなんですよ。それが、石垣の上に乗っかっている。その櫓の文脈を活かして、それこそ庭つづきで滲み出して、３つくらい広場内に配置したいなと思っていたんですよ。ところが、さっきのすっからかんにしたいという意見もあり、結局なくなったんですけど、僕らはあきらめているわけではなく、緑地帯の中にやぐらがおけるような四角の舗装が痕跡として残っていまして、今度緑化フェアで仮設的にひとつだけ作らせてもらえるようになったんですよ。やっぱりできるとちょっと違うじゃないですか。したたかに再復活を狙っているっていうことはあります。

泉：なるほど。素晴らしいですね。やはり全体と多様。

まっとうな都市デザイン、本当の都市デザイン

北原：あのね、まっとうな都市デザイン、本当のデザインを見ているような気がしてる。というのは、１回目のまちなか広場賞を獲った時に、「花畑広場」っていう広場の説明しかないから、悪い意味で言うと今日みたいに全体の歴史を含めて、それで見なかったわけですよ。もう一度見たときに、主人公が全く逆転している。主人公はこの広場であって、周りがどんどん変わっていくわけです。歴史を見ればわかるじゃないですか、昔の写真も残っているわけだから。よく僕らが図と地で考えるとき、ヨーロッパの街みたいに広場が真ん中に合ってその周りに建物が広がっていく状況を想像します。だから、僕ら再開発って言うと、あのサクラマチっていうビルができて、それを中心に街を活性化させようと思うわけですよ。でも、あくまで建物はこの主人公をうまく盛り上げている背景なんですよね。でも、建物はどんどん変わっていくから、イメージを維持するのが難しい。加えて、歴史の変化をクスノキが見ていたのがすごいと思っていて、それをもっと見ているのがあの熊本城だとも思った。こういうアーバンデザインって日本でほかにあったのかなと思う。

札幌も頑張っているけど、札幌も結局大通りと駅前通り、あそこが桜町・花畑地区と違うのは、地下道つくって、地下から公園に全部出てこれるようにしている。あれも背景をつくっているわけですよ。なんかね、花畑広場は主人公を広場に位置づけて、建築を含めたまちとしてデザインしていて、それを時間かけてつくっていく事例として稀有な存在だと思っています。こういうのを「アーバンデザイン」って言っちゃえばいいという気がすごくしました。本当に良いのは、花畑広場でまちなか広場研究会が開催されていることだね。最初、山下さんはとんでもないことを考えたなと思いましたよ。「寒いじゃないか」とか、「Wi-Fi をどうしていれるんだ」とか、「液晶が明るくて見えない」とか思ってましたけど。（笑）今日ここでこういう会議をしていること自体が、図と地が全く逆転している気がしてて、良い錯覚を感じました。

田中智：確かに僕らはブランクというか、間をつくっているんですよね。変わらない間を維持しようとしている。

北原：まさに中心で変わらず間があるんですよね。主人公の間ってすごいいいなと思っています。

田中智：なるほど、その捉え方は素晴らしいですね。ありがとうございます。半田さんはどうですか？

半田：今日 JR 熊本駅からここまで 30 分ぐらいですかね、歩いてぐるぐる回りながら来ました。駅から最初の方は、路地っぽい所とかがあったんですけど、シンボルプロムナードに来るとパッと開けるっていうか、本当にまちの結節点だなと実感する場所でした。

今日話を聞いていて、歴史的にもそういう場所だと理解し、その連続性をさらに実感しました。この先、熊本駅と桜町・花畑地区の間のまちに対しての計画にも、ビジョンがあるっていうことが尚素晴らしいなと感じました。

田中智：あのビジョンはまだ素案なんです。これから叩かれていくんですけど（笑）。そういうものと現在整えつつある都市計画がちゃんと関係していくのが大事ですよね。ふつう結構バラバラになっちゃうんですけど。

半田：開発している区域だけを区切ってやるっていうよりは、全体的に波及しつつ関係性を持ちながら、広がっていく。これが熊本の素晴らしい所だなと思います。

泉：まちなかの回遊動線が変わっているかんじなんですかね？

田中智：そうだと思います。明らかに人の流れが変わりつつある。花畑広場がオープンしたら確実に変わると思いますね。

星野：熊本は鉄道が使いづらいので、熊本駅よりもこのバスセンターの方が利用者が多いんですよね、３万弱くらいかな。元々ポテンシャルはあったんですけれども、まちと関係が切れていたように思います。こういう過ごせる場所が無いので、田中智さんが見せたような風景だったわけです。最終的には、既存の持っているものを活かせているんじゃないかなと思います。

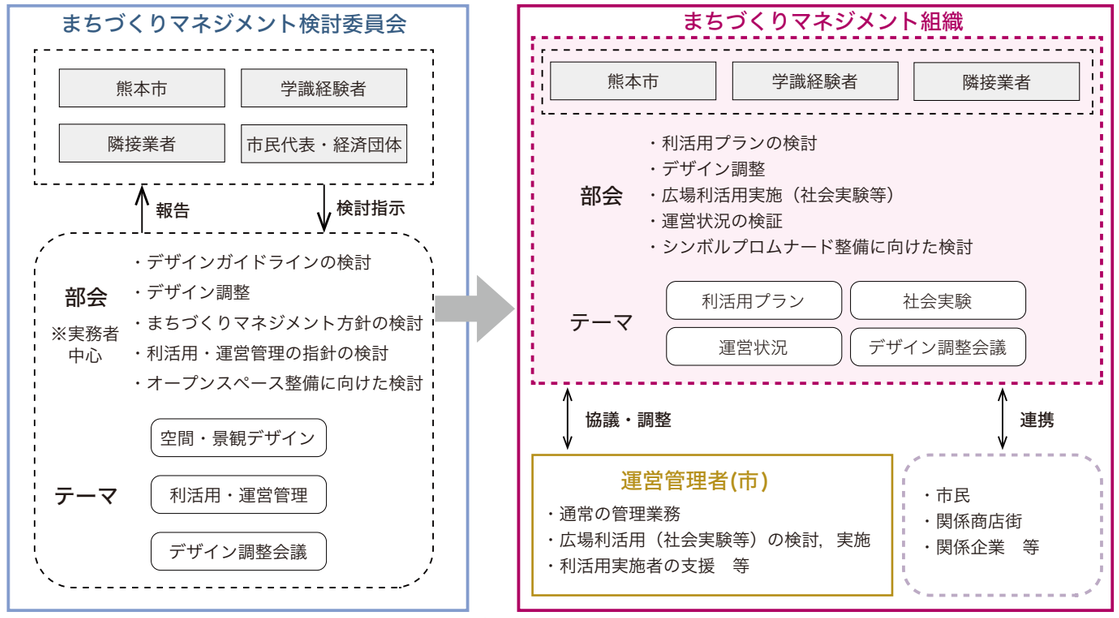
広場プレイヤーの醸成と一体利用が促す化学反応

田中智：田中尚人さんはどうですか？

田中尚：先ほど星野先生がプレゼンされた熊本駅は、やっぱり熊本市街地からちょっと遠いっていうのが、これからの課題だと思うんです。花畑広場については、（仮称）花畑広場の時期に「こういう風に使うんだよ」っていうのを割と見せてもらっていた。熊本駅の時はタナパーでしか見れなかったものが、花畑広場では例えばクリスマスマーケットとか、市民の人たちが「ここで演じていいんだ」と思わせる、プレイヤーになる可能性を見せてもらったんじゃないかな。だから一緒につくるっていうことを、僕はすごく身近に感じれた。僕は形をつくる議論にはかかわってこなかったので、「じゃあどうやって楽しもう」とか、「ここでビールを飲んだらおいしいよね」というようなことを考えたくなる可能性を随所に見せてもらった。

熊本駅の整備プロセスで「まず困ったことはありませんか」と聞いておられたお二人が、今度は、「こうやったら楽しいよね」とか、「熊本のまちはこうしていきたいよね」っていうようなことを取り入れて、実際に試していった。例えば「くのいすはこうやって使うんですよ」みたいに。そういう可能性を持ったプロセスが、「だんだんつくる」の次のステップである「よかとこつくる」ってところに響いているのかなと。そのプロセスに関する工夫を是非聞きたいなと思います。

田中智：今後のことを話していませんでした。先日、広場に関する指定管理者のプロポーザルをやったんです。結果的によかったなと思うのは、被選定者がサクラマチクマモトの管理者だったということです。だから、ここの館（やかた）と広場が一体的に運営されるということができます。さらに、熊本城ホールの指定管理者も別にいるんですけど、僕はそことも連携して欲しいと思っています。熊本城ホールで学会がひらかれた際に、そのレセプションだとか展示だとかがこの広場に滲み出してきて、一体的に使うとか、ここでしかできないことが多分できると思うんですよね。そういう一体利用と、醸成された広場の使い手が化学反応と言いますか、お互いに刺激を与えあったりして、あるいはコラボレーションして、ここでしかできないことが広がっていくといいなと思います。理想はそのコラボレーションによってエリアイメージが上がっていって、さっき僕が描いていたビジョンみたい



：まちづくりマネジメント取組体制

※田中智之氏によるプレゼンテーション資料を編集したのち掲載

に、周囲も「こういうことっていいよね」ってことを共有できる。例えば、小さなオープンスペースを持つビルができたりですね。そういう効果が広がっていくのが目指すべきイメージだと思っていますね。

田中尚：熊本には昔から「よかとこ」が沢山あると思うんですよね。それが見えにくかったりとか、今の時代にそぐわなかったりとかして、「ちょっと使いにくいな」という印象を、田中智さんや星野さんによって新しく形が得られることで、可能性が見えてくるとか、見方が変わってくる。その時の使い手として市民の皆さんが「熊本はまだまだ捨てたもんじゃない」と思ってくれるといいな。

熊本城の仮設見学路には皆さん行かれましたかね？あそこを熊本の方が気に入ってくれているのがすごいいいなと思ってですね、「こんな熊本城見たことない」、「あんなに傷ついた熊本城が再生していく姿は、今だけしか見れない」というポジティブに捉えられる形をつくってくださるのは大事なこと。そうやっていろいろ試しながら、怒られることもあるでしょうけど、挑戦していくことは大事かなと思っています。田中智さんや星野さんを応援したいと思っている市民の方は多分たくさんおられるので、良いなと思いました。

田中智：仮設見学路の構造ってすごいんです。是非皆さん見て欲しいんですけど、めちゃめちゃスパンを飛ばしてるんです。設計は日本設計で、基礎は置基礎を用いて、それを軽やかに支える鉛直柱を針のように扱っている、見たことのない構造になっています。あれはすごいデザインされているので、皆さん是非見てください。

田中尚：熊本城周辺は文化財なので基礎を打てないんです。なので普通はやらない、でも、熊本では「無理」って言わずに「やる」のがすごい。最初は正直文化財の人はやめてくれと思っていたと思うんですけど、実現したら文化財の人も「やって良かった」と。彼らもプライドがあるからですね、専門家として絶対に古いものを守らないといけないと言っている人たちも認めるデザインだったっていうのが、すごい良かったなと思います。

参加者：今日お話を聞いてて、他の街では絶対できない「全体最適化」のようなことが行われているのが、不思議でしょうがないです。例えば、公園管理課に行ったらダメでしたみたいなことがよくあるじゃないですか。そういう話じゃなくて、1つのビジョンに統合されている。みんながその気になっていってる様が、不思議でしょうがない。その要因が聞きたいです。

田中智：2つあります。行政の懐が深いってことと、よく言われるんですけど、建築と土木が仲がいいこと。これは意外に無いことと言われていて、そのコンビネーションがうまくいっていると思います。

星野：決して建築学科と土木学科は仲が良くいいと言い切れませんけど、二人はなんか仲がいいよね（笑）。

田中智：ぜひこの後「よかとこ」見てください。

右ページ

上図：桜町・花畑地区の都市イメージ（整備前）
デパートと旧産業文化会館が通りに対して２枚の壁となっている、かつ花畑公園が緑が繁茂して鬱蒼としており、市民が寄り付きにくい空間構成となっていた。また、回遊性も乏しかったことを図示化。

下図：桜町・花畑地区の都市イメージ（整備後）
通り庭の構成を有することで、人びとが通り易くなり回遊性が向上した。また、桜町・花畑地区の規模感で、多様な日常の楽しみの場を併せ持つ空間性を達成している事例は少ないと解説。

クロストークレポート

「桜町のメインプロムナードは、オープンスペースが主役であるという真っ当な都市デザイン」

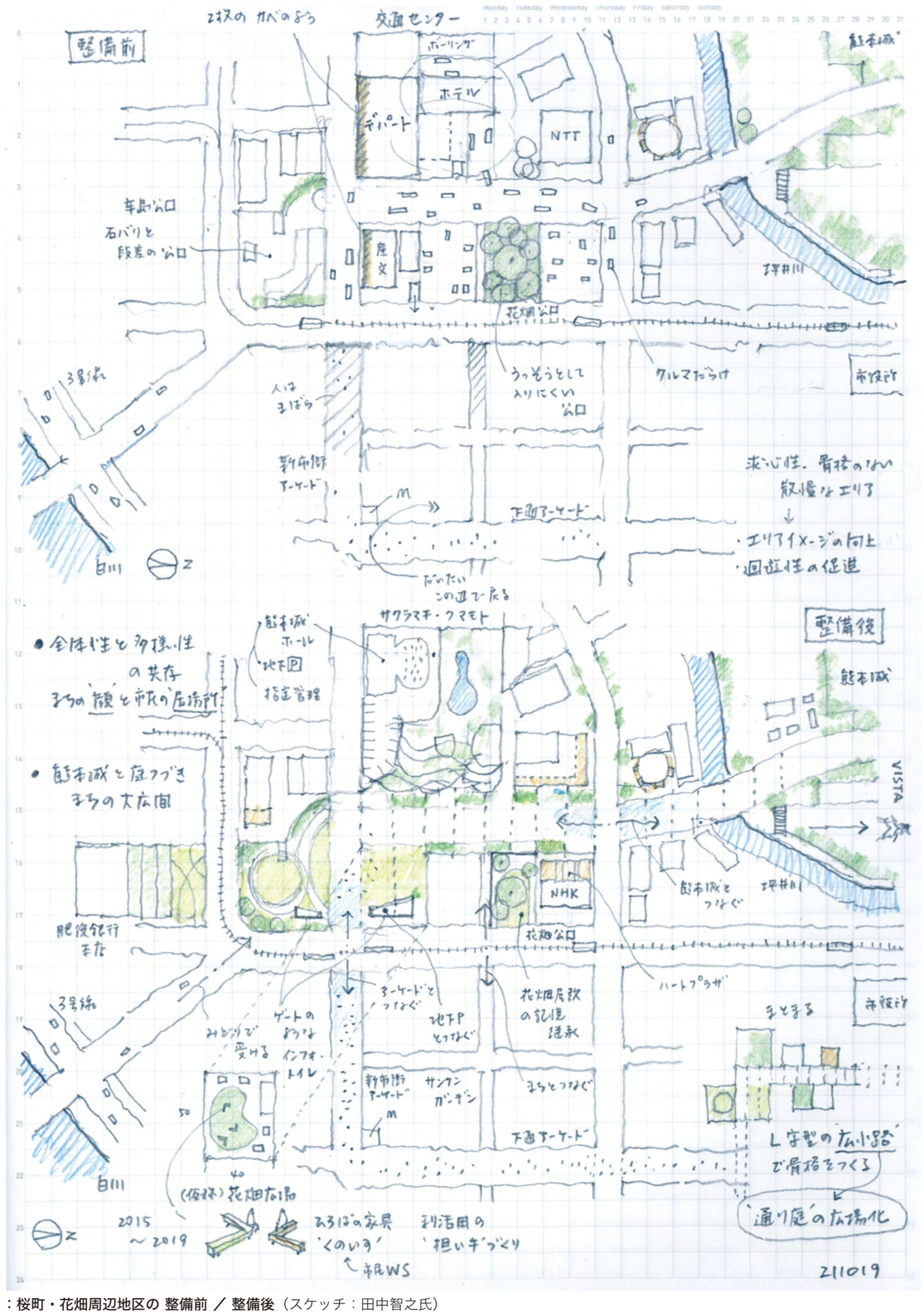
建物が主役なのか、オープンスペースが主役なのかという図と地の関係の議論は、建築・都市計画分野としては聞き馴染みのあるものだが、自分がこの言葉の意味を初めて実感したのは、まさにメインプロムナードにおける本シンポジウムでこの言葉を聞いた時だった。

商業空間に勝るとも劣らないオープンスペースの魅力とポテンシャルは、プロムナードで堂々と行われたシンポジウム自体が体現していた。印象的だったのは、シンポジウムの進行中に傍を通りかかる市民たちが「一体何のイベントなのか」と関心を示し、中には聴衆に話しかけてくる市民が何人もいたことだ。落ち着いた熱狂のような雰囲気のシンポジウムは、「広場はメディア」だと改めて認識させられる瞬間であり、古くから熊本の市街地において要となってきたこの場所が歩行者空間として戻ってきたという感動をにわかに覚えた。

まちなかにこれほどのオープンスペースを設けたことの価値を、今後どのように測定し、証明していくのか、メインプロムナードでのソフト面での取組が楽しみである。

文責：東京大学大学院 空間計画研究室 岡田潤氏

：桜町・花畑再開発エリア鳥瞰イメージ　○出典：桜町・花畑周辺地区まちづくりマネジメント検討委員会資料より



：桜町・花畑周辺地区の 整備前 ／ 整備後（スケッチ：田中智之氏）

「みんなでつくる」

市民協働

３つ目のクロストークは田中尚人氏による、熊本まちなか広場における実践「オモケンパーク」「Street Art-plex Kumamoto」「Shirakawa Banks」の紹介を軸に「みんなでつくる」の話題提供が行われた。田中尚氏はまず１部、２部の振り返りを行い、３つのクロストークは「だんだんと、よかとこを、みんなでつくる」と、連続性のあるレクチャーであると解説し、３部は空間の使い手に焦点を当てたプレゼンテーションを行った。

１つ目の実践として広場的空間を持つオモケンパークが紹介された[*1]。オモケンパークは所有者である、面木健氏の「広場的な場所があったらいいな」という想いをみんなで共有し育んでいる場だと述べ、営利目的だけでない価値づくりを実践している事例だと解説し、私有地が広場的状況をつくる可能性を示唆した[*2]。

２つ目の実践として Street Art-plex Kumamoto が取り組んできた、まちを楽しむための哲学と実践が紹介された。まちなかにある余白を広場に見立てて取り組んできたイベントは、「商業的利益を優先せず、多様な活動に門戸をひらき、日常と表現活動との間に境界をつくらない」ことに注力し、「表現自体」を楽しむことに主眼が置かれていた。つくり手、つかい手が楽しんでいる風景の広がりが、広場を成立させていると指摘している[*3][*4]。

３つ目の実践は Shirakawa Banks による白川水辺で催されている白川夜市の取り組みを、広場的な水辺として紹介された。白川は行政区を跨ることなく、熊本市の中心を流れていることがひとつの特徴として挙げられていたが、長らくその水辺は活かされずにいた。その状況下で、ミズベリングをきっかけに現 Shirakawa Banks のジェイソン・モーガン氏を中心に活動がスタートしたことが白川夜市の経緯である。2019 年３月からほぼ毎月第４土曜日を開催している活動は、コロナの状況下でも適度な距離感をつくりながら、熊本の水辺を再評価できる活動を続けている[*5]。

さいごに、熊本まちなか広場におけるつかい手の実践を「広場的空間」「広場的イベント」「広場的水辺」に見立てることで、熊本らしい新たなにぎわいを語ることができたとレクチャーをまとめる。

実践ベースのまちづくり @ 久留米

田中尚：さっきも問いがありましたけど、「なぜ熊本でそういうことができそうなのか」とか、「これからどうしていくのか」っていうようなことを、久留米からおこしの半田さんにまず聞いてみたいと思います。半田さんお願いします。

半田：合同会社 H&A brothers の半田と申します。よろしくお願いします。今日は福岡県久留米市から来ました。僕自身は元々は大学から東京の方に行って、15 年ぐらい建築の学校行ったり、仕事をしたりしてＵターンで福岡県の久留米市に戻ってきました。私有地を公共的に使うみたいなところで言うと、今は家庭菜園と広場付きのアパートの経営と管理をしています。管理している建物はすごい古くて、空室も多く、借りてくれる人がいなかったんです。敷地の余裕を活かして、広場と家庭菜園を設けいろんな方に使ってもらえるようにしました。すると、だんだん人が集まり、空室も埋まって、まちに広げていくことができたという状況になっています。

僕自身は自分事というか、不動産の課題があったからこそ、そういったふうなことをやり始めたんですけど、まちでもやっぱり同じように、「自分はこうやったらまちが面白くなるんじゃないか」って考えている方が、それぞれの分野で結構いて、その人たちが思い思いに動いている。例えば「川辺をもっと活用していこう」と思う人もいたりとか、「公園ももっと使えたらいいよな」とか。それって行政の施策ではない、それぞれが思うことをどうやったらいいかっていう実践ベースだと思っていて、久留米ではそういうことが起きています。

田中尚：久留米にも、山下さんが関わってらっしゃいますよね？熊本の人はよくわかると思うんですけど、久留米は歴史のある都市で、“ ブリヂストン ” があったりしますよね。あと、割と若い人が、面白く楽しそうにやってる印象があります。昔から久留米はそういうまちだったんですか？

半田：久留米は「Chietsuku Project[*6]」といって、知恵と知恵をくっつけようというプロジェクトがあります。だいたい 30 代 40 代のメンバーが中心となって「まちをもっとを使っていこうよ」みたいなことをやっていて、最近は 20 代の方たちもそこに加わっています。僕らが「Chietsuku Project」始めたとき、それよりもっと前に 40 代 50 代になってる方たちがまちづくりとかをやられていました。そういった方たちが、若い人が新しいことをやり始めても叩かず、温かく見守ってくれたので、割とやりやすかったなという印象はあります。

田中尚：第１部で星野先生が話されたときに、熊本駅周辺で 35 歳そこそこの世代に誰が任せてくれたのかっていうときに両角先生が上におられて、若い皆さんに任せるみたいな、まさにそういう感じですね。

半田：イベントやったりしたら、協力してくれたりですとか顔出してくれたりしました。僕らもそういった方々のお店に行ったり、なんか良好な関係というか、一緒に楽しんでやっていくっていうのがすごい良かったかなと思います。

田中尚：20 代ってことで言うと、スタッフとしてやってくれている熊大の学生さんが会場に結構います。学生の皆さんからは熊本のまちとか、久留米はどういうふうに見えてるのか、ってあとで聞いてみたいというふうに思います。半田さんにお聞きしたいんですが、最近の若い人はこんなこと考えてますよみたいなこと教えてもらっていいですか？

半田：最近の若い人は、まちづくりをやりたいって人が意外と多い。「あの町に関わりたい」「建築とかの仕事だけではなくて、面白くしたい」など、そのようなことに興味がある人が多いなと思いますね。僕らのところに仕事の手伝いに来てくれる学生も文系とか、建築以外の学生とかでもやっぱりそういった方が多いです。

田中尚：ありがとうございます。久留米でも同じような課題があって、それを今若い人がやってるってことでした。つぎに、今から 20 年前に葉山耕司さん（以下、葉山）たちが「Street Art-plex Kumamoto」を始めた頃はどうだったんだろうっていうのを聞いてみたいと思います。

アートがつくるまちのインフラ

葉山 (Street Art-plex Kumamoto 実行委員長)：
私は祖父の代から中華料理屋「紅蘭亭」というところをさせていただいております。商店街というのは通常、振興組合の集合体でできておりまして、そこの会議で「こういうことをやってはどうだろうか」と提案した内容が通ったのが最初ですね、2002 年ごろです。当時の環境はというとですね、大規模大型郊外店舗、いわゆるアメリカ型の店舗ができ始めた頃でした。その状況下で、「中心地活性化をどうするか」という議論が盛んだったんですね。消費行動の変化に伴い、まちなかに来られる人も減る、売り上げも減る、事業費も減る、今までやっていた共同売り出し宣伝事業ができない ...「できないよどうする！？」っていう煮詰まった状況がありました。当時私は青年部長やってたんですが、何もしない青年部長だったんですね（笑）。それである日、「パフォーミングアートをアーケードの中でやりましょう」というふうなことを思いついて、ある程度の予算でできるっていう試算が自分の中にあったのでやったんです。あと表現活動は、損得勘定抜きに皆さんが楽しんでいただける、いろんな方が参加できると思っています。それと、集客ばかりを目指すのではなくて、自然にまちなかのあるスポットにステージも作らず、特に表示もせずそこにパフォーミングアートが純粋にあるっていう状況をちょっとつくってみてはどうかなっていうのが話の始まりですね。

田中尚：ありがとうございます。今から 20 年前の商店街っていうのはどんな雰囲気だったんでしょうか。

葉山：基本的には、やっぱり 80 年代とか 70 年代の高度成長の成功体験が抜けきれてなかったと思います。

田中尚：まだ右肩上がりみたいな感じ？

葉山：まあすでに止まってましたけど。そういう状況でなおかつ転換期でした。例えば、次の世代の商売をどうやるかなど、要するに跡継ぎや売り上げなどいくつかの曲がり角にきてました。通りを使うということの意味合いで言うと、例えば警察と連名で「通りで音楽をやってはいけません」ということを堂々と張り紙をしてきた。それは、当

*1 オモケンパーク
○出典：https://omoken-park.jp/

*2 オモケンパークにみられる広場的状況
○公民館のしあさって × あそびの生まれる場所 読書会の様子

*3 GENESIS Back to the street 2021
○出典：https://www.facebook.com/artplex.jp/

●哲学 (philosophy)

1. 商業的利益を優先させません。
2. 全ての表現スタイルに門戸を開いています。
3. 実行にあたっては極力「日常」と「表現活動」との間に境界を設けません。
4. 関与する全ての人は表現者を支援する立場でこれに臨みます。
5. プロポートする表現内容は「表現自体」を表すことを主眼とします。＝非（イデオロギー/思 想/宗 教/信 条/ ）

*4 Street Art-plex KUMAMOTO が掲げる哲学
○ Street Art-plex KUMAMOTO 公式 HP より内容を引用したのち編集・掲載

: STREET ART-PLEX KUMAMOTO EXTRAVAGANZA 2019

然住んでる人がいたからですね。

ルールがないのはいわばその野生の状態と同じで、それが町の魅力だったんだけども、大人だったらやる以上はルール定める必要がある。当時は「こういうことだったらやってもいいんじゃないですか」っていう一つのモデルをつくろうとした時代だったと思います。

田中尚：そのお話が、ホームページに書いてある哲学にも通じているんですかね？

葉山：今思い返して聞いててみるとそうだったんだなと、全部僕の言葉なんですよね？（笑）相当ひねくれてますね。集客じゃないじゃん、ってことでしょ？そんなことを真正面から言ってるようなもんですから（笑）。

田中尚：僕は葉山さんと、熊本県立劇場の外部評価委員でご一緒させていただいています。僕は「まちづくり」で葉山さんは「アート」を専門として関わっているんですけど、アートとまちづくりって実は近いんじゃないかなっていうのを、Street Art-plex Kumamoto の哲学を読んですごく思ったんです。

葉山：そうですね、インフラストラクチャーっていうのがありますよね、電気、ガス、水道ですか。アートとか表現活動はそれだと言ってるんですね。簡単に言うと、通常は美術館の中に、絵画や、アートやプロパーはあるし、その中にコンサートとかそういうものある。Street Art-plex Kumamoto はその額縁を外してやるっていう試みで、相当な冒険なんです。

田中尚：熊本地震のときにも、いろんなものがストップして、コロナ禍でもストップしてます。学びを止めないであるとか、アートを止めない、文化活動を止めないっていうことが、復興のためにはすごく大事です。県立劇場では、「県劇の広場」っていうのを姜尚中館長が言っているんですけども、それに似たまさに前衛的な活動だと思います。

葉山：特にチャレンジングな場面っていうのは熊本地震直後ですね。皆さん、あの頃は心がかなり荒んでいたと思います。ストレスなどいろいろある中で必要なものは、例えばまちを歩いててコンサート会場に足を運ばないような人が、なにか表現を聞いて立ちすくんでしまう。或いは、ずっと聞いちゃうみたいなことが本当は起こってほしいと思います。実際にやってみたら起きてたんですよね。

それと今回のコロナ、これもいろんなものを全て中止にした。我々のアートプレックスもいろんなものを中止あるいは延期して、やっと先日「JAZZ OPEN 2021」をまちなかで開催できた。7、8 ヶ所の路上でジャズフェスができ、先週はバッハとショパンのメモリアルコンサートを路上にグランドピアノを置いてできるようになってきたんですよね。そういう町の危機、文化の危機のときに、なるだけやってるんです。これも先ほどのインフラの話しに通じる内容かなと思います。

田中尚：ありがとうございます。まだまだ葉山さんの話を聞きたいんですが ... 最後に僕が聞きたいのは、葉山さんから見てこの花畑広場はどうですか？

葉山：広いですね、うん。そして、実は 1 回使ってるんです、2003 年のときですね。そのときは、こういった綺麗な状況ではなかったんですけど当時の辛島公園で、最終的なグランドセッションやったんですよ。いろんなところで、いろんな国の人たちがパフォーマンスしたあとに、全員辛島公園に集合しました。そのときそこにいたのは、インドネシアのジンバルワナ、竹ガムランの集団、九州ジャンベクラブ、アフリカンジェンベの人たち 100 人ぐらい。それから前衛舞踏の人たちが 20 人ぐらいで、劇団の人もいました。ジャズマンもいたし、

*5 白川夜市 (2021.07.24)

そんな人たちが集まってセッションをやるっていうのをやったんですよね。そういうことをもう一度できます、という感じがします。

田中尚：まさに、田中智先生が目論んでいるのはこういうことじゃないかなというふうに思います。歴史のモチーフというか、古いものをただ学ぶのではなくて、まず使い方から読み解いていく。それに葉山さんみたいな使い手がシンクロすると、セッションになる。新しい使い方であるとか、そういうのがつくっていけたらいいなと思います。葉山さんありがとうございました。

環境循環型の場づくり

田中尚：実はですね、もう 1 人ですね、ジェイソン・モーガンさん（以下、ジェイソン）におこしいただいています。ジェイソンさんの個人的な想いもあると思うんですけど、白川の水辺をジェイソンさんはどう思っておられるのかを教えていただいていいですか？

ジェイソン：白川バンクスのジェイソンです。私はアメリカ出身で、15 年前に熊本に来ました。当初から白川がすごい良いところだなと思っていました。まちなかを流れてるし、綺麗だし、夏になったらすごい気持ちよさそうで、なんか入りたくなるような川です。だけれど周りの人たちに、「入りたくなるでしょう？」って聞いたらみんななんかすごい変な顔を見せて ...（笑）おそらく、昔から水害が起きていたり、あんまり綺麗なイメージを持っていない話も聞いてて、ちょっと怖いイメージ、汚いイメージとかあったんだと思います。けれども、最近はいいと思います。すごい綺麗でまちなかにこんなにいい川が流れてるところがそんなになくて、位置もいい。星野先生のデザインとか、ほかの取り組みで綺麗にもなって、使いやすくなった。

5、6 年前ぐらい前にミズベリングのプログラムでマルシェとかやったら、宣伝とかそんなになかったんだけども、場所がいいから自然に人が結構来てくれて、これは継続してやっていけば何かいいことになるんじゃないかなって思ってました。

田中尚：ありがとうございます。季節によりますけど、月一で第 4 土曜日に白川夜市をされていますよね？簡単に白川夜市について教えてもらっていいですか。

ジェイソン：白川バンクスは 4、5 年前ぐらいにつくられた任意団体で、2020 年から法人化しました。主に白川の周りに住んでいる 4 人のコアメンバーにプラスして、市役所のメンバーが入っています。白川夜市だけじゃなくて、その白川周辺とかも盛り上げていこうっていう、想いでスタートした団体ですね。「まずは夜市からやっていきましょう」っていう感じだったんですが、1 年間ぐらい続けてコロナウイルスの影響で、いろいろこけました（笑）

ほかには、河川敷の東側に九品寺というところがあるんですけど、みんな九品寺に住んでるとかもあるし、歴史もあるところですので盛り上げる活動をしてます。

田中尚：ありがとうございます、僕から最後にします。白川バンクスの人たちが考える水辺の姿、水辺の目標像みたいなのがあれば教えていただきたいです。

ジェイソン：今目指してるのは河川敷でやっている夜市の収益で、河川敷を整備することです。草刈りや手入れしたりして、その場で一つの循環をつくり、資金を生み出し、またその場所を綺麗にするっていうのが 1 つの目標になってます。というのも白川夜市を始める前は予算があっても、年に 3、4 回ぐらいしか草刈りできなかったんです。その程度の草刈りだと夏になっても草がすごい生えてしまう。夜市やり始めてからは、夜市やる前に草刈りをやって、夜市をやることでお

：白川左岸緑地「緑の区間」愛護会（白川バンクス）による清掃活動
◯出典：shirakawabanks Instagram

客さんがみんな草を踏んでくれるんで、自然と綺麗な状態になります。そういうちょっとした利活用で、より良い場所にしていきたいなというのは大事にしたいことです。本当は、夜市だけじゃなくていろいろしたいなと思ってますが、コロナウイルスが結構邪魔してます（笑）。

田中尚：皆さんもぜひ体験していただければと思います。すごいよかとこなんですよ！熊本は、知り合いの知り合いは知り合いぐらいの感じで、ちょうどいいくらいの大きさです。会ったら「何々さん元気しとるか」みたいな感じになるんですよね。そういう意味で、草刈りのような環境的な循環もあり、経済的な負担を減らそうという循環もある。何よりいいなと思うのが、元々はあんまり愛されなかった水辺を好きだ、「ここはこんな素敵なところで、よかとこだ！」っていうのを知ってもらう人たちの文化が上手に循環していく。まさに持続可能な形でやっている。

誰かだけのものではなくて、みんなの想いが描かれ、繋がっているっていうのが白川バンクスの活動の声を聞いてて思うような内容です。もし、よければご質問を伺いたいです。

半田：白川バンクスのメンバーが集まったきっかけはなんですか？

ジェイソン：市役所主催のミズベリング[*7]がきっかけです。いま思えば市役所に操られているような感じもしますけど（笑）。市役所の人たちがしてほしいっていう、なんとなくそういう雰囲気がありました（笑）。

利用されてるというのは冗談で、お互いの想いで一緒にやってるような感じでした。市役所だけでやっていると継続しない、終わってしまう、みたいな感じが多いと思うんです。いい感じでタイアップすることで、継続・持続可能になっていくと思います。可能性が大きくなるとイベントとか色々企画が増えていくので，周りにいる理解してくれる人だけでなく、自治会とかコミュニティの中でも理解が必要になってきます。周りの理解というか支援、みんなでやっていきましょうとか、みんなで楽しくしていきましょうという感じは重要で、勝手にやって周りの人たちに嫌われるのは怖い部分があります。

半田：なるほど。お話のなかでは、それぞれのエリアでやっている感じが見受けられました。一方で、３部が始まる前もお二人が仲良く話してるのも見たんですけど、他のエリアの動きと連動した活動はあるのでしょうか？

ジェイソン：結構あります。熊本市中心市街の近くにある子飼商店街でも夜市をやろうとされてるみたいで、タイアップできたらいいねとか、熊本市城見町通りで行われていた Seed Market（シードマーケット）[*8] もあって、やっぱりそういう取り組みとみんな繋がってるから白川夜市もできた。他にも良いことがあったので、コロナ禍でできないことも多いんですけど、2022 年は色々できそうな気もしますので、タイアップも検討したいです。

田中尚：葉山さんは白川夜市とかどう見られてますか？

葉山：ばんばんやってもらいたい。熊本には白川があって、坪井川がありますが、その白川の東側というのはですね、案外行かないんですよね。そのなかでも、バーをやってらっしゃったりとかアクティビティはある。あとはネーミングがいいんですよね、白川夜市って。とってもいいと思います。ミズベリングのお話が結実したというのは今わかりました。

田中尚：元々ジェイソンさんは Seed Market というのはどちらかというと葉山さんに近いところでやっておられて、その活動の種が水辺で花開いたのかな。

葉山：さっき白川を使ってみないかとジェイソンさんに誘われました（笑）。

田中尚：ありがとうございます。じゃあフロアの方からいかがでしょうか。

質問者（岩本唯史氏）：とても素敵なお話をいっぱい聞かせてもらいました。私からは、ジェイソンをちゃんとご紹介したくて … 実は「ミズベリングフォーラム 2019 ー川ろうぜ、街がえようぜ大会議ー[*9]」を開催しまして、その「川 (かわ) ろうぜ、街 (まち) がえようぜ大賞」というのがあったんですけど、そのファイナリストで大賞受賞者ですから‥キングですよ！（笑）

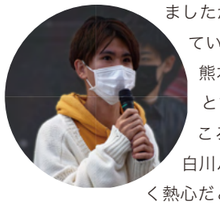
その時は、「当たっても砕けないジェイソン」っていう標語があって、そのジェイソンが白川夜市をやりたいって言ったけど、１ヶ月後とか２ヶ月後の開催が絶対無理だと言われ、地元の空気感暗いながらも、色々サポートしてくださる方がたくさんいて、実現にこぎつけたストーリーが評価された。そういう諦めない姿勢というのが、その時注目を集めたんですけど、その後もコロナがあっても諦めていない姿を見て、すごいなと思ってご紹介したいと思いました。あの時は本当にお世話になりました、ありがとうございました。

ジェイソンを初めて紹介してくれたのは木下斉さんで、僕の方にメッセージで「熊本におもしろい人がいるからちょっと取材行ってくれ」と言われて、あの木下さんが言うんやから、相当おもしろい人だろうと思ってたら本当におもしろかった。目利きの人も言ってるし、そのお眼鏡に敵う人たちもたくさんいるのも、熊本の魅力をつくっているなと言っときたいなと思いました。

田中尚：ありがとうございます。確か白川夜市は星野研がアンケート取ってると思うんですけど、どんな人が来てるのかとか、リピーターがどれくらいかということも合わせてどうですか？

星野：色々と携わっている目線からお話すると、白川夜市は地元目線がとても強いイベントだと思います。駐車場とか準備せずに、地域の方が月一のお祭りという感じで開催しているのが１番のポイントです。一方で、お店も素敵なので、県外とか、関係者の知り合いなど遠くから来ている人もいます。大甲橋というすごく人通りの多い橋の袂でやってるので、「何やってるんだろう」という形で来られる方もいるかな。やはり地元の子供達が飛び回っているというのが１番大事な気もするね。

田中尚：子供社長などの取り組みもそうですよね。子供さんたちの未来のシビックプライドというか、白川近辺に育って良かったなと彼らは思うんじゃないかなと思います。ぜひ、学生さんからもコメントもらいたい。学生から見てジェイソンはどういう風に見えているのかな？ 20 代も頑張らないとまちづくりは盛り上がらないと思うんですけど、どうですか？



学生（鶴園くん）：星野研究室修士２年生です。草刈りの話しがありましたが、研究室のメンバーも毎月参加させていただいています。僕は学部の時は東京の方にいたんですけど、熊本にきて水辺とか自然が身近にあり、その場所をとても大事にできるところが熊本のすごく素敵なところだと思います。ジェイソンさん達を始めとする白川バンクスの方だったり、その周囲の方たちもすごく熱心だと思うので、主催者側の熱と、熊本の方々の地元愛がリンクしていくと熊本がより良くなるんじゃないかと思います。

田中尚：ありがとうございます。他はいかがでしょうか。

まちなか広場を支えるインフラストラクチャー

北原：話を聞いていて、３つのクロストークが持つ連続性がすごくいいなと思いました。葉山さんが話すアートインフラという話のなかで語られた「日常と表現活動に境界を設けない」をきっかけに話すと、田中智さんの話の中であった「全体性と多様性」の話が改めて重要だなと。市民が一緒に居場所を考えたいという、「土木的なインフラ」と、ここにいると絶対に感じる「歴史的インフラ」と、「グリーンインフラ」っていうのはまさに全体性を支えるものなんです。加えて、このセッションで聞いた「アートインフラ」とか、それからまさにジェイソンが語る、「コミュニティインフラ」って、どっちかと言うと、多様性を支えるインフラで、どんどん生み出していく大事な要素とそれを支える骨格づくりを熊本は両方やっていると思ったんです。

このまとめで終わると、「熊本の空間すげえ」っていうので終わってしまって、「熊本のアーバンデザインを見た！」って言えちゃうんだけど、2020 年の全国まちなか広場研究会 in 熊本前年祭をオモケンパークのあの寒い中でやったのを思い出しました。あの小さな空間でも風が抜けて、なんて贅沢な空間なんだと思ったんですよね。あの空間というのはまさに多様性だし、アートの中での１番面白いインプロビゼーションを担っている。僕はセッションが好きでね、何かわかんないという世界と、熊本の風土の中でつくられた空間がシーンとして繋がっていくというおもしろさがいいと思ったので。すごくいい順番で話しが聞けました。

田中尚：ありがとうございます。じゃあ同世代の泉さんから（笑）。

泉：完璧なまとめでしたよ。（笑）半田さんとか田中尚さんがされてるようなことと繋がってくると思いますけど、ゲリラ的な小さな動き、ヒューマンインフラがどのように影響を及ぼすのかに、僕は興味がある。例えば、シンボルプロムナードやその周囲の広場でもそれが出てきたら、この空間が変わるかもしれない。檜ができるかもしれないし、白川や商店街もそう影響があればいいなと。プラスアルファでカスタマイズできて、全体性、多様性の両方からのアプローチがあればいいなと思います。

***6「Chietsuku Project」**
：福岡県久留米市における西鉄久留米駅と JR 久留米駅という２つの駅が位置するエリアを中心として、まちに関わる 30 ～ 40 代の約 10 名が「このまちで みんなで食っていくんです！」をコンセプトに集まりお互いの知恵と知恵をくっつけようっと取組みや関係性のこと。(https://chietsuku.wixsite.com/chietsuku から引用・加筆)

***7 ミズベリング**
：まだまだ、十分に活用されていない日本の水辺を目を向ける活動であり、新しい水辺の活用の可能性を切り開くための官民一体の協働プロジェクト。ミズベリングの語源は、「水辺＋ RING（輪）」、「水辺＋ R（リノベーション）＋ ING（進行形）」。

***8 Seed Market**
：「Seed Market」とは熊本の若手店主の腕試しの場。若きクリエイターたちの集まる楽しくて新しい市場を目指した取組みの名称である。毎月第２土曜日開催していた。(https://www.facebook.com/seedmarket/)

***9「ミズベリングフォーラム 2019　ー川ろうぜ、街がえようぜ大会議ー」**
：https://mizuno-miyako-toyama.org/article/notice/mizbering-forum-2019/

クロストークレポート

「最近、まちづくりに関わりたい若者が多い」

白川夜市をテーマとした議論の中で出てきた言葉である。この現象の背景には、「まちづくり」という概念の広がりが大きく影響しているように思われる。トップダウン型の「都市計画」に対して、ボトムアップ型の「まちづくり」が見られるようになったのは 1970~80 年代であるが、当初のまちづくりは、地域コミュニティの考えをまとめあげて行政に届けるといったような敷居の高いイメージがある。その後民間の活力を導入する潮流や、阪神淡路大震災をきっかけとした NPO 活動の広がりなどが影響し、様々な形態の「まちづくり組織」が誕生するとともに、まちづくりと呼ばれる活動の裾野は広がり、まちづくりに携わる敷居も下がってきたと言える。近年は地域おこしのイベントが全国的に見られるようになり、一回のイベントを成功させるというよりも、単発で終わらせずに持続可能なまちづくりへと繋げることの方が本質的な課題となりつつある。山下裕子さんの言葉を借りるならば、まちづくりに携わる人たちは多かれ少なかれ「パブリックマインド」を持っている。そしてパブリックマインドに欠かせない要素に「利他の精神」があると思われる。他人のために積極的に動くことに美徳を見出す心こそ、資本主義とは離れたところにある「まちの価値」を高めるものに違いない。シンポジウム翌日の白川夜市に参加し、入口でコロナ感染対策を実施するスタッフや、無償でトイレを貸し出す近隣の小学校など、あらゆる場所で利他の精神がこのイベントを持続させていることに改めて気付かされた。

文責：東京大学大学院 空間計画研究室 岡田潤氏

熊本のまちなか広場をまとめる

田中尚：ありがとうございます。田中智さんがおっしゃる「全体性と多様性」、それはハードという言い方もあるし、作り手と使い手という言い方もあると思います、２つを繋げつつ次の世代を考えないといけないです。今あるものは、今の最適解なので、次の世代で何かしら変わらないといけないと思います。不易流行という言葉がありますけど、変わるものと、変わらないもののバランスをどう考えるか。

歴史的に脈々と繋がってきたものにはかなりの確率で正しいものがあるんですけど、変えていかないといけないものと同時に見えてくるということがあるかなと思います。今日も熊本城を背負って会議をしているし、ここには広小路もあった、そこの緑は僕らより長生きしてる。あと熊本はやっぱり水が重要です。最後のセッションで水辺に話が戻って行ったのは、必然かなと思いました。葉山さんが坪井川と白川との間にある城下町というのが、町としていいとおっしゃられた。そこに広場というのは図と地での見え方であり、それを活かしてこれからも市民の皆さんと一緒につくっていければなと思います。

また、スピード感を持つことも大事ですけど、熊本では「だんだんつくる」。そして、「だんだん」にはありがとうの意味も加わった。「有難い」というのは「感謝」と「有ることが難しい」という２つの意味があると言われています。今日皆さんとコロナ禍なのに一期一会でお会いできて、いろんな出会いがあったかと思います。これを来年横浜に繋いでいければと思います。名残は惜しいんですけど、さいごに北原先生にコメントいただきたいと思います。その前に今日のまちなか広場研究会の準備を整えてくれたのは増山晃太さん（風景工房）、吉海雄大さん（以下、吉海）です。彼らからコメントもらいたいと思います。

吉海（熊本大学）：熊本大学の吉海です。熊本の皆さんとともに、準備を進めてまいりました。今日は初めての外ということで色々シミュレーションして、こういう素敵な場所で、皆さんと色んな話ができて良かったと思っています。一言だけお話をすると、次世代の僕らがこういう場所をつくったり、公共空間を魅力的にする上で、僕らが何をできるかなと思って聞いていました。そう考えた時に、色んなお話がありましたけれども、素敵な場所だったり、いい空間だったりに足を運んでそこを体験する。加えて、そこをよく知るということに意識を向ける、自分たちでそこに身を置く、ということが近道なんじゃないかなと思って聞いていました。色々な話を聞けて僕もすごく勉強になりました。ありがとうございました。

田中尚：来年は横浜ということですけど、まちなか広場を考えるということで何かまとまっていくということも大事だと思うんですけど、可能性が広がって行くというのも大事だと思います。今日ここで皆さんにお会いできた一期一会を大事にですね、今日ご参加頂いた皆さんに拍手を持って終わりたいと思います。皆さんどうもありがとうございました。

司会：皆さん、どうもありがとうございました。来年、2022 年度は横浜市です。そこで今日は横浜市より株式会社エイバンバ代表の番場俊宏さん（以下、番場）がオンラインで参加されていますので、番場さん一言お願い致します。

番場：ご無沙汰しております、皆様。すみません、飛行機も宿も取ってたんですけど、噴火にびびって行けませんでした（笑）僕は何も事情を知らず、相変わらず「山下裕子被害者の会」状態なんですけど、来年どうやら横浜ということでぜひ頑張って準備に勤しみたいと思います。最後のまとめの方をしっかりお話伺ったんですけど、すごく熊本の魅力を全面的に伝えていただけたので、横浜もそれに負けず準備できたらと思います。よろしくお願い致します。杉崎栄介さん (以下、杉崎) からもコメントいただけますか？

杉崎：横浜市芸術文化振興財団の杉崎と申します。皆さんの話を聞かせて頂きました。山下さんから来年横浜ということで、非常にありがたいお話で、こちらも頑張って皆さんの話を繋げていこうと思います。本当に熊本の話はおもしろくて、横浜とは全然ちがう良さがあるなと思って伺ってました。市民の方々が、主人公になって公共空間を活用しているという姿が本当に羨ましく見ておりまして、横浜も赤レンガ倉庫のような素晴らしい空間がありますが、プロの制作会社が使うような場所になっています。市民の方が気軽にイベントをやったりとかがなかったりするので、そういうところを変えていかなくちゃというような印象を持って伺っておりました。あまり大きなことは言えませんが、クリエイターと一緒に来年の会議をやると思うので、そういう方々といい議論をして実践に繋げていければと思います。今日はお招きいただきましてありがとうございました。

司会：お二人ともありがとうございました。それでは最後に主催者を代表し、全国まちなか広場研究会副会長の北原啓司よりご挨拶を申し上げます。

北原：まちなか広場研究会副会長の北原と申します。別名「山下裕子被害者の会」ですけど、2021 年から言い方を変えまして、「山下裕子サポーターズクラブ」になりました。少し大人になりました（笑）。さっき田中尚さんが一期一会とおっしゃってましまが、今年話を聞いてもう一度行かなきゃと思いました。今日もいろいろなお話を聞いて歴史も感じたし、人々の動きも感じたし、広場というとどうしても空間の研究みたいに思うんですけど、違うんですね。広場を切り口に色々なライフスタイル、モノも見えてくるし、熊本の新しい動きも見えてくる、たくさん聞けたような気がしてまた来たくなりました。花畑広場の空間もどのように変わっていくのか楽しみです。さいごになりますが、会場後方に加藤清正像が見えるんです。さっき風土や歴史の話してたら、加藤清正さんが「俺がつくったんだ」と言っても違いないお顔をしていた。僕らは天守閣を見ながらシンポジウムをするのは初めてなんで、贅沢だなと思いました。寒かったですけど（笑）でも、温かい会ができたというのも良かったですし、来年は横浜に行ったとしても、僕はまた熊本に来てこの花畑広場の完成を見たいなと思いました。最後になりましたけど、ずっとメモを書いてくれてる熊本大学の方々、そして市役所の方がずっと立って見てらして、みなさんや熊本大学の先生方にもこんな会をやっていただきました。お礼とともに最後の感謝の挨拶とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

司会
吉田 恵理氏

熊本チーム スタッフ
増山 晃太氏

熊本チーム スタッフ
吉海 雄大氏

◯全国まちなか広場研究会 in 熊本開催の経緯

新型コロナウイルスが蔓延する直前の 2020 年 2 月に、全国まちなか広場研究会 in 熊本の議論がスタート。当初は、2020 年 10 月開催を目標に進められた会議体であったが、コロナ禍の煽りを受け 2020 年度は異例の “ 前年度 ” 開催。「やれることをやる」の試みを以って、初のオンラインでの実践となり、2020 年 10 月 23 日に「オモケンパーク」にて前年祭が開催された。翌年 2021 年 10 月、満を持しての現地開催。オープン間近の花畑広場を活用し、屋外かつハイブリッド形式 (オンライン＋オフライン) でまちなか広場研究会 in 熊本を開催することができている。

：2020 年 2 月 オモケンパークにて熊本開催のミーティング

：オンラインミーティング

：2020 年 10 月 23 日 前年度祭 @ オモケンパーク

●第 8 回全国まちなか広場研究会 in 熊本 報告書

発行：2022 年 3 月
全国まちなか広場研究会、熊本大学
編集・デザイン：増山晃太、吉海雄大
問い合わせ：全国まちなか広場研究会
(http://machinakahiroba.main.jp/)

●第 8 回全国まちなか広場研究会 in 熊本 スタッフ

企画・運営：◯熊本大学
星野裕司、田中智之、田中尚人、増山晃太、吉海雄大
学生スタッフ：◯田中尚人研究室
髙良幸作、竹原大旗、菊地宏太郎、堀内航太
◯田中智之研究室
福島早瑛、濱崎沙耶
◯星野裕司研究室
山口賢人、鷲見泰成、阿南陸、末羽睦美、鰺坂健太
鶴薗敦也、宮田比奈、宮嵜果鈴